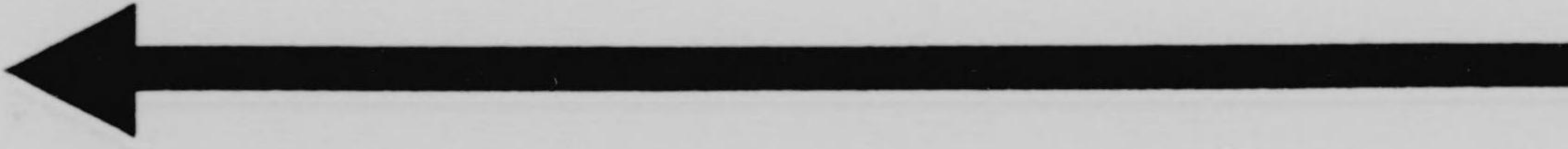




377
179



始



377-179



オスカア、ワイルド原著
谷崎潤一郎譯

ウヰンダミーヤ夫人の扇

(無断興行を許さず)

東京 天佑社發行

大正
8 5. 26
内交

はしがき

予が此の戯曲の翻譯を企てたのはもとゞ予自身の發意に出でたのではなく、近代劇協會主宰上山草人氏の勸説に従つて出來たものである。予は元來翻譯と云ふものを企てたことがなかつた。然るに去年の秋近代劇が有樂座に興行される際、上山氏の爲めに何かな脚本を提供すべきハメに陥つて、已むなく咄嗟に此の翻譯を試みたのである。勿論、今回單行本として上梓するまでには、其の時の臺本に筆を入れて、誤譯だの生硬な箇所だのを一と通りは訂正した積りであるが、其の一

間に支那旅行をしたり、父の病死に遇つたりしたので、しみじみと落ち着いて眼を通す譯には行かなかつた。再版の折もあらば尙一層完全なものにしたいと思つて居る。

上山氏が予に囑するに特に此の戯曲を擇んだのは、何の理由によるかを知らない。上山氏を始め多くの人は、予を熱心なるワイルド崇拜者、——ワイルド黨の一人であると認めて居るのではないかと思ふ。若しさうであつたら、予は決してワイルドの崇拜者ではないことを、茲に改めて斷つて置く必要がある。成る程予も嘗てはワイルドの好きな時代があつた。

高等學校に居た頃、サロメやドリアン、グレイを讀んだ時には可なり昂奮させられたものであつた。しかし其の後度び度びワイルドの著作に親み、その傳記などを繙くに従つて、だんだん厭氣がさすやうになつた。私には何よりも作物を通して窺はれる彼の態度、——粗野な、俗悪な、輕佻浮薄な、あて氣の多い彼の態度が、鼻持ちがならないやうに感ぜられた。就中インテンションスの文章などの氣障さ加減は、到底反感を抱かずには讀過することが出来ない。ワイルドを完膚なき迄に悪罵して居るアルフレッド、ダグラスの説に依れば、彼

の作物にはオリヂナリティーと云ふものがない。悉く皆ブレエヂアリズムの所産であるさうな。たゞ纒かにいくらかでもオリヂナルな特色のあるのは、バラアド、オブ、レディング、ジエエルだけであると云ふ。此れは餘りに酷な批評かも知れないが、多少の眞理は含んで居るに違ひなからう。

「ウインダミア夫人の扇」は、ワイルドの書いた物のうちで、比較的今でも私の氣に入つて居る戯曲である。此の戯曲には割り合ひに俗悪な分子が少く、腰のうはついた所がなく、しんみりした、品のいゝ、落ち着きのある喜劇だと云ふ感じ

がする。いかにも才藻の有り餘つて居る藝術家が、すなほになだらかに書き流したと云ふ趣が見える。例に依つて嫌味な警句や下らない皮肉がところどころに出て来るが、そんな物はあまり氣にしない方がよろしい。全體の筋が、日本の人情にもかまつて居るから、實演用の脚本としてもサロメなどより適當であらうかと思ふ。——そんな考から、上山氏の請を容れて翻譯を試みた次第である。

大正八年三月

ウキシンドミーマ夫人の扇

オスカア・ワイルド作
谷崎潤一郎譯

=175=

1952
5/10



第一幕

場面——カールトン、ハウスの臺地に建てられたウキンダミヤ住宅のモーニングルーム。扉CとR。本、新聞紙等が置かれた机R。チーテーブル付きのソファL。見晴しLに向つて開かれる窓L。テーブルR。

(ウキンダミヤ夫人はテーブルRに倚り、薔薇の花を青い瓶に生けて居る。)

(パーカー登場)

パーカー。奥様は今日お客様にお逢ひなさりませうか。
ウキンダミヤ夫人。あゝ——誰方かお出でになつたの？

第一幕

ウキンダミーヤ夫人の扇

パートカー。ダーリントン卿がお出でになりました。

ウキンダミーヤ夫人。(一寸考へて)お通し申しておくれ。—今日は誰方にでも

お目にかゝるから。

パートカー。はい畏まりました。

(パートカー退場)

ウキンダミーヤ夫人。晩にならないうちにお目にかゝりたいと思つてゐたら、

来て下さつてはんとうにいゝ鹽梅だつた。

(パートカー扉Cに登場)

パートカー。ダーリントン閣下。

(ダーリントン扉Cより登場)

(パートカー退場)

ダーリントン卿。奥さん御機嫌よろしうございます。

ウキンダミーヤ夫人。御機嫌よろしうございます。ダーリントンさん。あ、握手するわけにはまわりませんの、薔薇の露で両手がすつかり濡れて居りますから。綺麗でございませう。今朝程、セルビトから届いたのでございますよ。

ダーリントン卿。成程見事ですな。(卓上の扇を見て)さうして、これはまあ大層結構な扇ですな。一寸拜見さして戴けませんか。

ウキンダミーヤ夫人。さあどうぞ、ほんとうに綺麗でございませう。それには私の名前が書いてありまして、大事な物でございませう。私もたつた今見たばかりなのでございますが、夫が誕生日のお祝ひに贈つてくれましたの。今日は私の誕生日なのでございますよ。

ダーリントン卿。え、さやうでございませうか。

ウキンダミーヤ夫人。え、今日私は一人前の女になつたのです。私の生涯で一番大切な日なのでございます。さうぢやございませんこと？ 今夜の宴會はそのためなのでございますよ。まあ、どうぞおかけなすつて下さいまし。

(また薔薇を揃へて居る)

ダーリントン卿(腰掛けながら)今日があなたの御誕生日なのでございますか。さうと知つたらお宅の前の往來に美しい花を敷きつめて、その上をあなたがお歩きになるやうに致しましたのに、惜しい事でございました。一體、花と云ふものはあなたのために作られて居るのです。

(間)

ウキンダミーヤ夫人。ダーリントンさん、あなたは昨晚外務省で私を随分おなぶりなさいましたのね。またおなぶりなさるのぢやございませんか。

ダーリントン卿。私が？ 奥さん。

(バーカーと従僕とが、盆と茶道具とを持ってCに登場)

ウキンダミーヤ夫人。バーカー、其所へ置いておくれ、それでいゝよ。(ハンケチで濡手を拭き、Lの位置の椅子、テーブルに行つて坐る)こちらへいらつしやいませんか、ダーリントンさん。

(バーカー扉Cより退場)

ダーリントン卿。(椅子をとつてLへ行く)奥さん、さうおつしやられると困りますな、私がどんなことを致しましたでせう？(テーブルLに向つて坐る。)ウキンダミーヤ夫人。だつて、貴方は昨夜一と晩中、私にいろいろなお世辭をおつしやつたぢやございませんか。

ダーリントン卿。(微笑しながら)いや、今時の男子は皆手元が不如意でござい

ましてね、出すものと言つたらお世辭よりほかございませんよ。ほんとうに出せるものはお世辭よりほかないんですからね。

ウキンダミーヤ夫人。(頸を振りながら) いよえ、私は眞面目なお話をしてゐるのでございますよ。ほんとうに眞面目なのですから、お笑ひになつてはいけません。私はお世辭を言はれるのが嫌ひなのでございます。それに、男の方が心にもない出まかせを言つて、女を大變嬉しがらせたと思つてゐらつしやるのが、私には一向わかりませんわ。

ダーリントン卿。いや、ところが私はほんとうの事を云つて居たのです。(夫人のすすめる茶を受取る)

ウキンダミーヤ夫人。(嚴に) ダーリントンさん、私はさう思つて居ります、私はあなたと口論などを致したくはございません。私はあなたが大好きなので

ございますもの。其事はあなたも御承知でもいらしやいませう。けれどももしあなたが世間並の男の様でしたら、あなたを私が好きになる等は決してございませぬ。確にあなたは普通の人間よりずっと優れて居らつしやいます。さうして時々、あなたはわざと悪人がつてお見せなされる様に思はれますわ。

ダーリントン卿。私達は誰でも、いくらか虚榮と云ふものを持つてゐますからね、奥さん。

ウキンダミーヤ夫人。まあ！ ですがあなたはどうして特にそんなことをみえになさるんでございますの？ (未だテーブルに向つて坐つたまふ)

ダーリントン卿 (LCに坐つたまふ) いや、此頃はね、自惚の強い連中が大概みんな善人らしい顔つきをして、交際社會を勝手に泳ぎ廻つて居りますよ。だから私の考へでは悪人らしく見せかけた方が、却つて奥床しく謙遜な態度

になるだらうと思ふのです。然しこゝにかう言ふことがあります。もしあなたが善人らしく見せかけると、世間はあなたを頗る眞面目に受取つて呉れますが、悪人らしく見せかけると世間は眞面目に受取つて呉れない。これが樂天主義の愚な所です。

ウキンダミーヤ夫人。さうしますとあなたは、世間から眞面目にとられないでもよろしいのでございませうか。ダーリントンさん。

ダーリントン卿。いや、世間などは構ひません。世間が眞面目にとる人間と云ふと、どんな人間でせうかな？先づ上は僧正から、下は、た迷惑な厄介者に至るまで、ありとあらゆる下らない人間がみんな其のお仲間なんです。私はたゞあなたにさへ眞面目にとつていたゞければ結構なのです。世間の誰よりもあなたに眞面目にとつて戴きたいのです。

ウキンダミーヤ夫人。何故でございませう、何故私に限つて、眞面目にとられないとおつしやいますの？

ダーリントン卿（一寸躊躇して）何故と申しますとね、私達は親しい友達になるだらうと思ひますから。親しい友達にならうぢやございせんか。あなたは何時かきつとお友達を欲しくなるだらうと思ひます。

ウキンダミーヤ夫人。どうしてそんなことをおつしやいますの？

ダーリントン卿。いや——私達は時々友達と言ふものが欲しくなるのです。

ウキンダミーヤ夫人。だつて私達はもうとうから仲の好いお友達だと存じますわ。ね、ダーリントンさん。私達は何時迄もお友達で居られますわ。あなたさへ何しなれば、——

ダーリントン卿。何しないつてどんな事でせう？

ウキンダミーヤ夫人。つまり馬鹿げたことをたんとおつしやつて、友情を汚すやうなことをなさらなければ。あなたは私をビュリタンだと思つてゐらつしやいますのね。私にはいくらかビュリタンらしい所がございますの。その様に育てられてまゐつたのでございます。今でもそれを喜んで居りますの。私は子供の自分^時に母に亡くなられましたので、御存じの通り父方の叔母に當るジュリア夫人と長い間一緒に暮りましたが、その叔母は非常に厳格な人でございました。世間の人はもう忘れかけたことでございますが、正と不正との區別を叔母ははつきりと教へて呉れました。その點について叔母は少しも容赦しない人でした。私にしても勿論でございます。

ダーリントン卿。奥さん！

ウキンダミーヤ夫人。(ソーフアに倚りながら) あなたは私を時代後れの人間だ

と思つていらつしやいますのね。——え、どうせさうでございます。私はこの様な時代と、同じ高さに立つて居たくはございませんわ。

ダーリントン卿。あなたは今の時代を大變よくないと考へてゐらつしやいますか。

ウキンダミーヤ夫人。はい、今の人は人生を一種の投機のやうに考へて居るやうでございますわ。けれども人生は投機ではございませんわ。人生は一つのサクラメントでございます。人生の理想は愛でございます。その人生を清らかにするのは犠牲でございます。

ダーリントン卿。(微笑しながら) 凡そ世の中に犠牲にされる位、くだらないものはありませんな！

ウキンダミーヤ夫人。(前にかゞみながら) そんなことをおつしやるものではご

ございません。

ダーリントン卿。いえ、私はさう申します、私はさう感じて居ります。私はそれを知つて居ります。

(バーカーCに登場)

バーカー。奥さま、今晚は見晴らしへ毛氈を敷くのでございませうか。如何いたしませう。

ウキンダミーヤ夫人。雨は大丈夫でございませうかね？　ダーリントンさん。

ダーリントン卿。あなたの誕生日に雨を降らせたくはありませんな。

ウキンダミーヤ夫人。バーカー、では、早速さうするやうに、みんなに言ひつけておくれ。

(バーカー扉Cより退場)

ダーリントン卿。(坐つたまふ)　そこであなたはどうかお考へになりませう？　—

—勿論これは私の空想から出た一例にすぎないのですが——もし假に、結婚してから二年ばかりになるある若い夫婦があつて、その夫がふとしたことから或る外の女と親しい間柄になるとします——のみならずその女と言ふのが、人格が疑はしいばかりでなく、いろ／＼面白くない噂のある女だとします——その女を繁々と訪ねたり、一緒に食事をしたり、時にはまた支拂までもしてやるといふやうな場合にですな、——その細君は何等か慰藉の道を求めべきものでせうか、あなたはどうかお考へですか。

ウキンダミーヤ夫人(顔をしかめる)　慰藉を求めるのでございませう？

ダーリントン卿。さうです、求めるのが當り前です——その細君にはそれだけの権利があると私は思ひます。

ウキンダミーヤ夫人。夫が陋劣だからと言つて——その妻までも陋劣にならなければいけないでせうか。

ダーリントン卿。陋劣といふ言葉は怖ろしい言葉ですね。奥さん。

ウキンダミーヤ夫人。怖ろしいことでございますとも。ダーリントンさん。

ダーリントン卿。あなたも御存じでございますが、一體善人と云ふものはこの世の中に随分害毒を流すものでございますよ。さうして彼等はその悪事を世の中に大變必要なものにしてしまひます。それがまた彼等のし出かす最大の害毒です。人間を善人と悪人とに別けるのは甚だ可笑しな話です。人間は逢つて見て面白い人と、面白くない人とに別れるだけです。私は面白い方の人間です。さうして奥さん、どうあつても、奥さんも矢張りその方の組におはいらなさるんです。

ウキンダミーヤ夫人。あ、さう、さう、(立ち上つて、ダーリントン卿の前のRを通り過ぎながら)ダーリントンさん、あなたは其所にいらつしやいまし、私はいま、ちよつと花を片付けてしまひますから。(テーブルRCに行く)

ダーリントン卿(立ち上つて椅子を動かしながら)それからまた私の考へを申しますと、あなたは大層近代生活を批難してゐらつしやるやうに思はれますが、勿論大に批難すべきことがあるのは私も認めて居ります。例へば、今日の多くの婦人は、みんな金で雇はれて居るといふやうな事をですな。

ウキンダミーヤ夫人。そんな人達のことはお話しなさないで下さい。

ダーリントン卿。では、金で雇はれてゐるやうな人達の話は、止めに致しませう。無論怖ろしい人間なのですから。そこであなたは世間が認めて、不都合だとすることを犯した婦人は、永久に許すことが出来ないとほんとうにお考

へなさいますか。

ウキンダミーヤ夫人。(テーブルのそばに立ちながら) それは許すことが出来な
いと思ひます。

ダーリントン卿。それでは男子は如何でせう。婦人に對するやうに、男子に對
しても同じ法律がなければならぬとお考へですか。

ウキンダミーヤ夫人。ええ、さうでございますとも！

ダーリントン卿。私の考へでは人生といふものはさう言ふ嚴格な、固定的な堅
苦しい規則で定められるやうな、簡單なものではないと思ひます。

ウキスダミーヤ夫人。もし世の中にさういふ嚴格な、固定的な規則がありさへ
すれば、人生といふものはもつと、もつと、簡單になるだらうと思ひますわ。
ダーリントン卿。あなたはその規則に例外をお認めにはならないでせうか。

ウキンダミーヤ夫人。少しも認めませんわ。

ダーリントン卿。まあ、奥さん。あなたは何といふ可愛らしいビュリタンで
あらつしやるのでせう。

ウキンダミーヤ夫人。可愛らしいは餘計でございますわ。ダーリントンさん。

ダーリントン卿。でも、さう言はずには居られませんでした。私は誘惑だけに
は打克つことが出来ないのです。

ウキンダミーヤ夫人。あなたはわざと弱々しい風をして、近代人がつてあらつ
しやいますのね。

ダーリントン卿。(夫人を見ながら)奥さん、只弱々しく見せかけただけの事だ
つたのです。

(バーカーCより登場)

バーカー。バアリック公爵夫人と、アガーザ、カアリスル嬢がお出ででございます。

(バアリック公爵夫人と、アガーザ、カアリスル嬢Cに登場)

(バーカー退場)

バアリック公爵夫人。(Cに進み來つて握手しながら) マアガレットさん、お目にかゝれて嬉しうございますこと。あなたはアガーザを覺えていらつしやいますこと? (L、C、を横ぎつて)

ダーリントンさん、御機嫌よろしうございます。あなたには娘をお近づきにさせたくはございません。あなたはづいぶん悪い方でいらつしやいますからね。

ダーリントン卿。さうおつしやらないで下さいまし、奥さん。悪い人間として

は私は全く出来損ひです。何故かと申しますと、世間の評判では、私はこれまでどの方面にも、間違つたことはしない人間ださうでございます。勿論それは人が陰口に申すのですがね。

バアリック公爵夫人。アガーザや、お前はあの方が怖くはないかい。この方がダーリントン卿とおつしやるのですよ。この方のおつしやることなどを一言でもほんとうにはいけませんよ。(ダーリントン卿R、C、を横切る) いえ、ありがたう、お茶はもう澤山でございます。(ソファに行つて坐る) 私達は只今マークビー夫人のお宅で、お茶をいたゞいたばかりなのです。相變らずひどいお茶でしたの。とてもいたゞけませんでした。でもその筈でございますよ。奥さんのお婿さんから下さるんださうですから。アガーザはねえ、今夜、お宅の舞踏會を大變楽しみに致して居りますのよ、マアガレッ

トさん。

ウキンダミーヤ夫人。(L、Cに坐つてゐる) あら、舞踏會ではございませんの。ほんの私の誕生日のお祝に、ダンスをやるだけなのでございますわ。それも極く小人数で、早終ひに致しますの。

ダーリントン卿。(L、Cに立ちながら) 極く小人数な、極く早終ひな、さうして極く撰り抜きな會でせうね。奥さん。

パアリック公爵夫人。(ソークアLに腰かけて) 無論さうでございませうとも、マアガレットさん、私共はお宅のことをよく承知して居りますわ。ロンドン中でアガーザを連れて來ても、夫がまわりましても心配のない所は、まあ、お宅位なものでございますよ。社交會はお終ひにはどんなことになるんでございませうかしら。いろ／＼な質のよくない人が、誰方の會へもやつて來る

んですもの。そんな人達が私の宴會にもやつてまゐりますわ。——もしその人達を招待しなからうものなら、それは大變でございませう。ほんとうにそんな人達は何とかした方がようございます。

ウキンダミーヤ夫人。私もさう思つて居りますわ。評判の悪い人なんぞ決して寄せつけはいたしません。

ダーリントン卿。(R、C) まあ、そんなにおつしやるな。奥さん、さうしたら私などは此邊には居られなくなつてしまひます——(笑ひながら)

パアリック公爵夫人。いゝえ、男の方のことではございませぬ。でも女は男の方とは違ひますからね。私達は善い人間でございませぬ。少くとも私達の或者は善い人間なのでございます。だのに私達はひどく隅つこの方へ押込められて居るのですわ。私達の夫は、時々たしなめてやらないと私達の存在までも

忘れてしまふでせう。だから時々たしなめてやつて、私達にそれだけの権利があることを知らせてやつた方がようございますわ。

ダーリントン卿。それが結婚といふゲームの變つた所なんですな——奥さん、尤もこのゲームも追々時代遅れになつて來ました。——兎に角細君は何時もいゝ札を持つて居ながら、きつと終ひの札を打ち損うのですよ。

パアリック公爵夫人。終ひの札と申しますと、それは夫のことなのでございますか。ダーリントンさん。

ダーリントン卿。今時の夫に對してはいゝ仇名ですな。

パアリック公爵夫人。ダーリントンさん、あなたは随分墮落したお方ね。

ウキンダミーヤ夫人。ダーリントンさんは下らないお方よ。

ダーリントン卿。まあ、奥さん、さうおつしやつてはいけません。

ウキンダミーヤ夫人。では、どうしてあなたは人生について、くだらないことばかりおつしやいますの。

ダーリントン卿。私の考では人生といふものは非常に重大過ぎるもので、とても眞面目にその話をする事が出來ないので。〔Cへ進み出る〕

パアリック公爵夫人。どういふ意味なのでございますの。ダーリントンさん、私は頭が悪うございますから、どうぞあなたのおつしやつたことを説明なすつて下さいまし。

ダーリントン卿〔テーブルの後に來て〕説明はしない方がようございませう。わかりやすく話をするのは心を見抜かれることになります。さやうなら。〔公爵夫人と握手をする〕それから〔舞臺の前面へ出て〕ウキンダミーヤの奥さん、さやうなら。今夜伺つてもよろしうございますか。どうか伺はせていた

だきたいものです。

ウキンダミーヤ夫人。(ダーリントン卿と舞臺の前面に立ちながら) え、是非お出で下さい。ですがあなた、あまり馬鹿らしい御冗談をおつしやるのはおやめなさいませよ。

ダーリントン卿。(微笑しながら) は、あ、あなたは私を作りかへやうとしていらつしやいますね。人間を作りかへるのは危険なことですよ。奥さん。(挨拶をしてCより退場)

バアリツク公爵夫人。(立ち上りCに行く) 何といふ面白い、憎らしい方でございませう。私はほんとうにあの方が氣に入りましたわ。だからあの方がお歸りになつてよかつたと思ひます。まああなたはお綺麗でゐらつしやいますこと。その上衣は何處でお求めになりましたの? あなたにお氣の毒なことが

ございますのよ。マアガレットさん、(ソファに行つてウキンダミーヤ夫人と一緒に坐る) あのアガーザや!

アガーザ嬢。はいお母さん。(立ち上る)

バアリツク公爵夫人。お前彼處にある寫眞帳を拜見したらどうだね。

アガーザ嬢。はいお母さん。(Lに進んでテーブルのそばに行く)

バアリツク公爵夫人。まあ、あれは大變スキツルの寫眞が好きでございますの。純潔な好い趣味ではございませんか。それはさうと私はほんとうにあなたをお氣の毒だと思つて居りますのよ、マアガレットさん。

ウキンダミーヤ夫人。(微笑しながら) 何故でございませう? 奥さん。

バアリツク公爵夫人。あの怖ろしい女のお蔭であなたはお氣の毒なことになつてゐらつしやるのです。あの女は立派な服装をして居りますが、それが一層

悪いことなのでございます。怖ろしい手本になるのでございますから。兄の
アウガスタスがあなた、ほらあの評判の悪い、やくざ者のアウガスタスがす
つかりあの女に陥り込んで居りますの。アウガスタスの様な人間があるとい
ふことは、私達女の身にとつては一つの阿責でございますわ。何と云ふ淺ま
しいお話でせう。あの女はとても社會には出られない女なのでございますか
ら。大概の女は過去を持つて居るものですが、あの女には少くとも一ダース
の過去がございます。さうしてそれがみんなあの女に相當した過去でござい
ますの。

ウキンダミーヤ夫人。奥さん、あなたは一體誰のお話をしていらつしやいます
の？

パアリック公爵夫人。アーリン夫人のことなのですよ。

ウキンダミーヤ夫人。アーリン夫人？ そんな方のことはちつとも存じません
けれど、奥さん、私にどんな関係があるのでございませう。

パアリック公爵夫人。アガーザや。アガーザや。

アガーザ嬢。はいお母さん。

パアリック公爵夫人。表へ行つて夕方の景色でも見たらどうだね。

アガーザ嬢。はい、お母さん。(窓上から出て行く)

パアリック公爵夫人。あの子は夕方の景色が大層好きでございませう。ほんと
うに優しい心持ちやございませうか。世の中には自然にまざるものはござい
ませんわ。

ウキンダミーヤ夫人。ですが今のお話は何でございませう？ 奥さん。あなた
はどういふわけであの人のことを私にお話しなさいませう？

バアリック公爵夫人。ほんとうにあなたは御存じないのですか。私達はみんなその事で困つて居るのでございますのよ。昨夜もチャンセン夫人のお宅で、随分な事だつてみんなが話して居りましたの。人もあらうにウキンダミーヤさんは何故あんなことをなさるのだらうと、申して居りましたの。

ウキンダミーヤ夫人。私の夫が——さういふ種類の女とどういふことをして居るのでございませう？

バアリック公爵夫人。まあ、なんと申したらいいでせう。それが肝心なことですの。あの人はね、繁々とあの女を訪ねて、どうかすると何時間も一緒に居て、その間は誰が来ても留守を使つて居りますの。尤も女の方なんかあの女をめつたに訪ねはいたしません。評判のよくない男を澤山お友達にして居るのでございますよ。——とりわけ私の兄は親しくして居りますの。ですから

ウキンダミーヤさんのやうな方が、さう言ふ所へ出入りするものが尙更悪く見えるのですわ。私はウキンダミーヤさんを濛範的の夫だと思つて居りましたけれど、今の話はほんとうらしいでございますの。私の姪達——あのサビーユの女を御存じでせうね——あの質素な、怖ろしく質素な、引込み思案な人間を御存じでせうね——何時も窓の處で編物をして居る、貧乏人のために面倒な仕事をやつて居る女たちでございます。こんな時節柄にはそれは大層いゝ事だと私は思ひますわ。ところがあなた、今の女がカーゾン街へ家を持つたのでございます。ちやうど其の姪達の住居の眞向ふへね。あの上品な街へ。私達はどうなることやらわかりませぬわ。姪達が申して居りました。何でもウキンダミーヤさんは一週間に四五度も其處へ行くのですつて。現にちやんとそれを見たのですつて。あの姪達は見ないわけには行かなかつたさうです。

勿論悪口などを決して申すやうな者ではないのですけれど、そのことを皆さんにお話して居りますのよ。中でも一番悪いことは、その女がある男から大變お金を捲き上げたといふ噂がございます。何でもその女は半年ばかり前に、之と云ふものも持たずにロンドンへ来たといふ話ですのに、今ではメイフエアに立派な家を構へるやら、毎日午後になると公園を馬車で乗り廻すやら、他にもいろいろなお話がございますの。さうしてそれがみんなウキンダミーヤさんを知つてからの事なのです。

ウキンダミーヤ夫人。まあ、私には信じられませぬわ。

バアリック公爵夫人。けれどもまつたくほんたうのことなのですわ。ロンドン中に知らないものはない位ですの。それで私はかうやつてあなたの所へお話にまゐりましたのです。あなたは早速ウキンダミーヤさんを、パンプルグか

ユックスへ連れていらつしやつた方がいゝと存じますわ。あそこへ行けばウキンダミーヤさんは外に氣が紛れるでせうし、あなたも始終あの人の番をしてゐることが出来ますわ。私達だつて始めて結婚した時分には、時々病氣の眞似をして温泉へ出掛けて行つては、仕方なしにまづい温泉を飲んだものですわ。たゞバアリックを田舎へ連れ出したいばかりにね。夫はいたつて誘惑されやすい性質でしたの。さうは申しますけれども、夫は無暗に人に大金をやるやうな眞似は致しませんでした。夫は見識が高い人ですから、そんなことは致しませんでした。

ウキンダミーヤ夫人。(言葉を遮りながら) 奥さん！ 奥さん、そんなことがある譯はございませんわ！ (立つて舞臺を横ぎりCへ行く) 私共は結婚してからやつと二年にしきやならないのですもの。子供が生れてからやつと半年

にしきやならないのですもの。(テーブル上の椅子Rに坐る)

パアリック公爵夫人。まあ、囁お可愛らしいでせうね。どんな赤ちやんでございませう。坊ちやんなの？ それ共お嬢ちやんなの？ 女のお子さんだと好いけれど、あ、さう、さう、男のお子さんでしたわね。お氣の毒でございませぬね。男の子は困りものですわ。——私の件などはもうそれはいけないんですの。每晚遅くなりましてね、とてもお話にはなりませんわ。それがあなたたつた二三ヶ月前にオックスフォードを出たばかりなのです。——何を敢はつて来たのだから判つたものぢやございませぬわ。

ウキンダミーヤ夫人。男つて皆悪いものでせうか？

パアリック公爵夫人。え、みんな悪い人ばかりです。一人だつて悪くない者はありませんわ。さうして決してよくなりつこはありませんの。男といふもの

は年はとつてもよくなることはありませんわ。

ウキンダミーヤ夫人。ウキンダミーヤと私とは互に思合つて結婚したのです。パアリック公爵夫人。そりや私達だつて始めはさうなのでございませぬわ。パアリックが、自殺する、自殺する、と言つては恐ろしく驚かしたものですから、つひその爲めに言ふ事を聞いてしまひましたの。それが一年も立たない間に、色々な女を漁り始めたのです。それ所か新結婚旅行も済まない中に、あの人が一寸小さいいな私の下女に妙な目付をしてゐるのを見付ましたの。私は早速その下女に暇を出してやつて、——あ、さう、さう、私の妹の處へ廻してやりました。あのジョージさんは近眼だから大丈夫だと思つて居ましたが、矢張さううまくは行きませんでしたわ。やつぱり彼處でもとんでもない間違ひがあつたやうでした。(立ち上る)さあ、もう、是れで失禮致しませう。

私達はよそで晚餐をする筈になつて居ますから。まあ、ウキンダミーヤさんのちよつとした間違ひなど、あまり氣になさらない方がようございますよ。早々何處かへ連れ出しておしまひなさいな。さうすればきつと、あなたの處へ歸つて來ますわ。

ウキンダミーヤ夫人。私の處へ歸つて來ますつて？ (Cの位置)

バアリック公爵夫人 (L、C) さうですよ。あの悪い女達に連れ出されても、結局夫は私達の所へ歸つて來ます。勿論いくらか傷はつきますけれど。ですから、まあ、芝居染みた喧嘩をなさるのはお止めなさいまし。男といふ者はそんなことは大嫌ひなのですから。

ウキンダミーヤ夫人。奥さん、御親切にいろいろお話し下さつて有難うございます。然し夫が私をだまして居るとは信じられませんわ。

アリック公爵夫人。まあ、あなた！ 私も一時はさう思つたことございますが、今では男といふ者はみんな悪魔だと思つて居りますの。(ウキンダミーヤ夫人鈴を鳴らす) さう言ふ不所存な者を扱ふのにはうまい物を喰べさせるのに限りますよ。上手なコックと言ふものは不思議な藝當をするものですよ。さうしてお宅には好いコックがおありでせう。ねえ、マーガレットさん、あなたにお泣きになるの。

ウキンダミーヤ夫人。奥さん御心配には及びません。決して泣きは致しません。

バアリック公爵夫人。本當に泣いてはいけませんよ。泣くといふ事は醜い女のためには逃げ場所で、美しい女のためには破産ですわ。アガーザや。

アガーザ嬢 (Lに入り來つて) はい、お母さま (テーブルL、Cの背後に立つ)

ベアリック公爵夫人。こちらへ来て奥さんにお暇乞ひをするんですよ。(再び舞臺の後面に来て)それからおついでにボバーさんにも案内状を差上げて下さいまし。あの方は近頃世間で評判の金持のアウストラリア人でしてね。あの方のお父さんは鐘詰を賣つて、それで財産をこしらへたのでございますつて。何でも大層おいしい食物ださうです。ですが召使共は決して戴かうとは申さないだらうと思はれます。兎に角息子さんは大層面白い方なんです。あの方はアガーザの利巧な話振りに、すつかり迷はされて居るんですの。娘を手放すのは辛うございますが、と申して何時のシーズンにも娘を嫁に遣れないやうな母親は、ほんとうの愛情を持つて居ないものだと思はれますわ。ではまた今晚伺ひます。(パーカー扉Cを開く)それから私の申上げたことをよく覚えてゐらつしやいませよ。早くあの人を田舎へ連出しておしまひなさい

まし。それが何よりでございますよ。ではさやうなら。アガーザや、さあ。
(公爵夫人並にアガーザCより退場)

ウキンダミーヤ夫人。まあ、何といふ怖ろしい事だらう。ダアリントンさんがおつしやつた結婚してから二年しきや経たない夫婦の話が、今になつて漸う意味がわかつて來たわ。あの女に大變なお金をやつたなんて、公爵夫人のおつしやつたことはまあほんたうだらうかしら。アガーザが銀行の帳簿をしまつて置く處を知つて居る。あの机の曳出しの中に違ひないが、あれを見ればわかるだらう。さうだ私はどうしても探し出してやらう。(曳出しを開ける)いゝえ、いゝえ、そんな事はある筈がない。(立つてCに行く)誰か根も葉もない悪口を言つたんだ！だが私は帳面を見ては悪いかしら？私はあの人

枚繰り調べる。につこり笑つて、安心したやうな溜息をつく。まあ、これで
すつかりわかつたわ。あんな馬鹿々々しい話には、一つだつてほんたうの事
なんかありやあしなかつたんだ。(再び帳簿を曳出して納める。納めた拍子に
ふと氣がついて、もう一つの帳簿を取出す) 此處に第二の帳簿がある。きつ
と内所の帳面だわ——錠がかゝつて居る! (開けやうとしたが旨くあかない。
机の上の紙切りナイフを見て、それを持つて、帳面の錠を切り、最初のペー
ジから調べ始める) 六百ポンド——アーリン夫人、七百ポンド——アーリン
夫人、四百ポンド——アーリン夫人、あゝ、ほんたうだつた。ほんたうだつ
た。まあ怖ろしい! (帳簿を床に投げる)

(ウキンダミーヤ卿Cに登場)

ウキンダミーヤ卿。お前、扇は未だ着かないかね? (R、Cに來つて、帳簿を

見る) マーガレットや、マーガレットや、お前は私の帳簿を開けて見たんだ
ね。お前にはそんなことをする権利はないのだ!
ウキンダミーヤ夫人。あなたは祕密を發かれたのが、怪しからんとおつしやる
のでせうね。

ウキンダミーヤ卿。私は妻が夫を探偵するのが、怪しからんと言ふのです。

ウキンダミーヤ夫人。探偵などを致したのではございませんわ。私はこんな女
がある事さへ、半時前まではちつとも知らなかつたのでございます。でもも
うロンドン中に知れ渡つた事なんださうですつて。あるお方が私に同情を寄
せて下すつて、御親切にその事を知らせて下すつたのです。あなたは、毎日
カーゾン街にお出でなさるんですつてね? さうして馬鹿々々しいほどのほ
せ上つて、その汚らしい女に、大變なお金を使つていらつしやるんですつ

てねー（Lを横切つて）

ウキンダミーヤ卿。マーガレット！、アーリン夫人のことをそんなに言ふものではありませんよ。お前はとんだ誤解をして居るのだ！

ウキンダミーヤ夫人。（夫の方を向きながら）あなたは大層アーリン夫人の名譽を氣にかけてゐらつしやいますのね。私の名譽も氣にかけて下さいまし。

ウキンダミーヤ卿。お前の名譽は傷けられやしないぢやないか。マーガレット、まあ、暫くそんな事は考へずにお置き。（帳面を机の中に入れる）

ウキンダミーヤ夫人。私はあなたのお金の使ひ方が不思議だと考へて居りますの。只それ丈でございます。ですが私はお金のことを氣にかけて居るのぢやございませんのよ。私達のはどんなにお使ひなすつたつて、それはあなたの御勝手でございます。然し私を愛してゐらつしやるあなたが、あなた

を愛するやうに私を仕込んで下さつたあなたが、純潔な戀愛からお金で買はれる戀愛へ、移つていらつしやつたことが心配だと申すのでございます。まあ、何といふ怖ろしい事せう！（ソファに坐る）さうして私ばかりが汚されたと思つて、あなたは何とも思つてゐらつしやらないのです。私は汚されてしまつたと思ひます、すつかり汚されたと思ひますわ。この六ヶ月といふものが今の私にはどんなに厭はしいものになつたか、とてもあなたにはおわかりがないでせう。あなたが下すつた接吻は思ひ出すさへ汚らはしうございます。

ウキンダミーヤ卿。（夫人の前を横ぎり乍ら）そんな事を言ふもんぢやない。私はこの世界中でお前より他に愛して居るものはないのだから。

ウキンダミーヤ夫人（立ち上る）そんならこの女は何でございます？

何故、

あなたはこの女に家を持たせておやりになりましたか？

ウキンダミーヤ卿。私はあの女に家など持たせてやりはしない。

ウキンダミーヤ夫人。でも、その爲めのお金をおやりになつたのではございませんか。そんなら同じ事ですわ。

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、私の聞いた處では、アーリン夫人は——

ウキンダミーヤ夫人。夫があるのでございますか。それとも夫といふのは架空の人なのでございますか。

ウキンダミーヤ卿。あの夫人の夫はずつと以前に死んで了つたのだ。今ではひとりぼつちなのだ。

ウキンダミーヤ夫人。親戚もおあんなさらないの？ (問)

ウキンダミーヤ卿。うん。

ウキンダミーヤ夫人。おかしいぢやございませんかね？ (Lに居る)

ウキンダミーヤ卿。(L、C、に居る) マガレット、私は今お前に話をしようとして居る——だから、もう少し私の云ふ事を聞いておくれ。——私の知つて居

る處では、アーリン夫人は身仕舞の正しい女なのだ。もし四五年前に——。

ウキンダミーヤ夫人。まあ！ (R、C、を横ぎつて) 私はあの人の身の上なんかそんなに委しく伺ひたくはありませんわ。

ウキンダミーヤ卿。(Cの位置に居る) 私は委しい事を話さうとするのではないのだ。私は只これ丈けの話をすのだ。——アーリン夫人も以前は世間から重せられ、敬愛せられた事もあつた。素性もよく、相當な地位もあつたのだが——夫人は何もかもなくなして了つたのだ——まあお前に言はせれば、自分からそれを捨て、了つたのだ。だがその爲に尙更いたましい目に逢つたの

だ。不運は堪へられない事はない——不運といふものは外から来る偶然な出来事なのだから。然し自分自身の過失の爲に、何時迄も苦勞をする——其處が人生の辛い處だ。もう二十年も前の話、あの夫人がほんの娘の時の事なんだ。あの夫人が人の妻となつて居たのは、お前の今迄よりも短い間だったのだ。

ウキンダミーヤ夫人。私はあの人の事など聞きたくはございません——どうぞあの人の事と、私の事とを一口におつしやらないで下さいまし。とても取合せにはならないんですから。(机に向つてRに坐る。)

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、お前はあの夫人を救つてやるわけには行かないかい。あの夫人は再び社會へ出たがつて居る。さうしてお前の助けを求めて居るのだよ。(夫人の前を横ぎる)

ウキンダミーヤ夫人。私に—

ウキンダミーヤ卿。さうだ。お前に。

ウキンダミーヤ夫人。何といふ厚かましい人でせう。(問。)

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、私はお前にお願ひをする。アーリン夫人に

お金をやつた事がわかつて了つても、私は矢張り、お前にお願ひをするのだ。

どうぞあの婦人を今夜の會に招待しておくれ。(夫人の坐つて居るLの位置に立ちながら)

ウキンダミーヤ夫人。あなたは本當にどうかしてゐらつしやいます！(立ち上る)

ウキンダミーヤ卿。いや、是非お前に頼むのだ。世間では兎や角といろんな噂をするけれど、然し世間では誰もあの夫人のことをよくは知つて居ないの

だ。あの夫人はいろいろな家に居たことがある。尤もお前の行く様な家には居たことはないかもしれない。それでも近頃の所謂交際社会の婦人達が、行く様な家には居たことがある。然しそれだけでは、満足して居ないのだ。あの夫人は是非一遍、お前に呼んで貰ひたいのだ。

ウキンダミーヤ夫人。それはあの女の勝利としてございませうね？

ウキンダミーヤ卿。いや、お前が善良な婦人であるといふ事を知つて居るからだ——それにもし一遍でも此處へ来れば、今迄よりはもつと確實な、もつと幸福な生活の機会が得られるだらうと思つて居るからだ。あの婦人はそれ以上お前と近付きにならうとは思つて居ない。お前は、もう一遍世の中へ出たがつて居る婦人を救つてやる氣はないかい？

ウキンダミーヤ夫人。いゝえ、いやでございます。もしあの女がほんたうに後

悔したのなら、自分を破滅させたり、その破滅を見て居たりした世の中へ、歸つて来たいと思ふ等はございませんわ。

ウキンダミーヤ卿。私はお前に頼んで居るのだ。

ウキンダミーヤ夫人。(横切つてRの位置の扉に進み) 私は晚餐の服装をしに参ります、どうぞ今晚は二度と再びその話をなさらないで下さい。アーサー、

(夫のそばに歩きながら) あなたは私が、父も母もないものだから、この世の中でひとりぼつちだと思つてゐらつしやるのね。さうして私を御自分の都合のいゝやうにあしらへると思つてゐらつしやるのね。けれどもそれは大間違ひでございます。私には友達がございます。澤山の友達がございます。

ウキンダミーヤ卿(LCの位置) マーガレット、お前は無分別な、馬鹿なことを言つて居るのだ。私はお前と議論をしたくはないが、然し今夜、アーロン夫

人を招待することは何處迄もお前にお頼みする。

ウキンダミーヤ夫人。(R、Cの位置) そんな事をするわけにはまわりません。

(LCを横ぎりながら)

ウキンダミーヤ卿。お前は厭だといふのかね？ (Cの位置)

ウキンダミーヤ夫人。はい、眞平でございます！

ウキンダミーヤ卿。まあ、マーガレット、私の爲だと思つて招待しておくれ。

あの夫人の最後の機會なのだから。

ウキンダミーヤ夫人。それが私に何の關係がございませう？

ウキンダミーヤ卿。善良な女といふものは、どうしてこんなに剛情なのだらう

！

ウキンダミーヤ夫人。悪い男といふ者は、どうしてそんなに弱いのでせう！

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、男といふものは一人として、妻となる女が

満足する程、善良ではないかもしれない——それはさうに違ひない——然し

お前はつまらないことを考へてはいけないよ。私はかつて一度だつて——あ

ゝ、こんな話は、さう云はれただけでさへ不愉快なのだ！

ウキンダミーヤ夫人。だつて、あなただけが他の男と違つて居るわけはござい

ますまい？ある賤しい感情の爲めに、生命を浪費して居ない夫は、ロンドン

に一人もないといふ事を、私は聞いて居りますの。

ウキンダミーヤ卿。私はその中の一人ではない。

ウキンダミーヤ夫人。餘りあてにはなりませんわ！

ウキンダミーヤ卿。お前は口ではさう云つても、心では私を信じて居るのだ。

そんなにお互の仲を悪くするやうなことを言ふものではない。たつた今し方

二三分の間に、私達の間には大變な距離が出来てしまつたぢやないか。まあ、腰をかけてその招待状を書くがよい。

ウキンダミーヤ夫人。どんな事があつても、書くわけにはまゐりませんわ。(テーブルの處へ来る)

ウキンダミーヤ卿。では、私が書く！(ベルを鳴して、腰をかけて、案内状を書く)

ウキンダミーヤ夫人。あなたは本當にあの女を招待なさるのでございますか。(夫の處へ進み來つて)

ウキンダミーヤ卿。さうだ。

(間。パーカー登場)

パーカー

パーカー。はい。(L、C、へ来る)

ウキンダミーヤ卿。この手紙をカーゾン街八十四番地A號アーリン夫人の處へ持つてお出で。(L、C、へ行き、手紙をパーカーに渡す)返事は要らないのだ！

(パーカーCより退場)

ウキンダミーヤ夫人。アーサー、あの女が此處へ來れば、私は侮辱してやりますよ。

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、そんな事を言ふものではない。

ウキンダミーヤ夫人。いゝえ、私はやつて見せます。

ウキンダミーヤ卿。これ、お前がそんな事をすれば、ロンドン中で、お前を笑はない女はありませんよ。

ウキンダミーヤ夫人。ロンドン中で私を褒めない善良の女はございませんわ。私達は餘り寛大すぎました。私達はいゝ手本を見せなければいけません。私は今夜からやらうと思ひますわ。(扇を取り上げながら) さうです、あなたは今日私にこの扇を下さいましたわね。誕生日のお祝に下さいましたのですわね。もしあの女が家の敷居をまたいだなら、私はこれであの女の顔を打つてやります。

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、お前はそんなことをしてはなりません。

ウキンダミーヤ夫人。あなたには私の心はわかりませんわ。Rに移る)

(バーカー登場)

バーカー

バーカー。はい。

ウキンダミーヤ夫人。私は自分の部屋で御飯を食べます。ほんたうに御飯なんかたべたくはないわ。十時半までに、すっかり仕度が出来上つて居るやうにしておくれ。バーカー。今夜は、お客様の名前をはつきりと呼び上げておくれよ。お前は時々早口に言ふから聞き取れないことがありますよ。私は間違ひのないやうにはつきりとお名前を聞いて置きたいの。いゝかい、バーカー。バーカー。はい、畏まりました。

ウキンダミーヤ夫人。あゝそれでよろしい。(バーカーCより退場)(ウキンダミーヤ卿に話しかけながら)アーサー、あなたに御注意申しますが——若しあの女が此處へまゐりましたら——

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、お前は私達を破滅させるのだ。

ウキンダミーヤ夫人。私達ですつて、私の生涯はもうあなたの生涯とは別れ

てしまつたのです。然しあなたが多勢の前で恥をかくのがお厭だつたら、すぐにあの女に手紙を書いておやりなさい。さうしてあの女が此處へ来ることは私が許さないと云つてゐると、知ちせておやりなさい。

ウキンダミーヤ卿。いやそれはなりません——そんな事は出来ないのだ——あの女はどうあつても来なければならぬのだ！

ウキンダミーヤ夫人。そんなら、私は今申上げた通りにいたします。(Rに行く)
く) あなたは私をさういふ羽目にさせたのです。(Rより退場)

ウキンダミーヤ卿(妻を呼びながら)。マーガレット！ マーガレット！ (問)
あゝ！ どうしたらいいだらう？ 私は妻にあの女の眞實を打明けるわけには行かないのだ。打ち明けたらきつと、恥しくつて生きてはゐられないだらう。(椅子にとつしりと腰を降して兩手で顔を覆ふ)

第二幕

場面——ウキンダミーヤ家の應接間、扉R、C、は樂隊の盛んなる舞踏室に向つて開かれ、扉L、C、は電燈の輝ける見晴に向つて開け放たれる。棕櫚、草花、きらめく燈火。部屋にはお客がいつばい居る。ウキンダミーヤ夫人は客に應接して居る。

パアリツク公爵夫人。(Cに来つて) ウキンダミーヤさんがいらつしやらないのはおかしいわね。ホバーさんがまた大變に遅いこと。アガーザや、お前、あの人と五遍ダンスをする約束をしたのかい。(後面に戻つて)

アガーナ嬢、はい、お母さま。

パアリック公爵夫人。(ソファに坐り乍ら)一寸お前の招待状を見せておくれ。ウキンダミーヤの奥さんが、カードの招待状を復活なすつたのは、ほんたうにいゝ事だわ——かうしてくれさへすれば、娘を持つ母親はみんな安心するでせうよ。ねえ、アガーザや。(招待状の中にある踊の番組の名前を、二つ削り取りながら)お行儀の好い娘は、あんな若い息子たちとワルツを踊るものではありませんよ。何だか間が早すぎて見場のいゝものではないからねえ！お前、終ひの二つの舞踏の時は、ホバーさんと一緒に見晴しへ出てゐてもいいよ。

(ダムビイ氏とブリムテール夫人とが舞踏室より登場)
アガーナ嬢。はい、お母さま。

パアリック公爵夫人。(扇を使ひ乍ら)あすこの空気はほんたうにいゝ氣持だことね。

バーカー。クーパー。クーパー夫人。スタットフィールド夫人。ジセームス、ロストン閣下。ガイ、パークレー様がお見えになりました。

(それ等の人々登場)

ダンビイ。スタットフィールドの奥さま、今晚は。これがこのシーズンの最後の舞踏になるんでございませうね。

スタットフィールド夫人。さうでございませうね。ダンビイさん。でも愉快なシーズンでございましたわねえ。

ダンビイ。はあ、大に愉快でした。公爵夫人、今晚は、これがこのシーズンの最後の舞踏になるんでございませうね。

パアリック公爵夫人。さうでございませうね。ダンピイさん。非常に気分のだれたシーズンでございましたわね。

ダンピイ。怖ろしくだれたシーズンでしたな。

クーパー、クーパー夫人。ダンピイさん今晚は。これがこのシーズンの最後の舞踏になるんでございませうね。

ダンピイ。いや、さうぢやありませんまい。少くともまだ二回位はございませう。(プリムデール夫人の方へ戻つて来る)

パーカー。ラフォード様、ジセッドバラア夫人。グレーム嬢。ホバー様がお見えになりました。

(それ等の人々登場)

ホバー。奥さん御機嫌よろしうございます。(ウキンダミーヤ夫人に言ふ) 公爵

夫人御機嫌よろしうございます。(アガーサに御辭儀をする)

パアリック公爵夫人。まあ、ホバーさん、ようこそ御出で下さいました。大層お早うございましたこと。あなたは此頃ロンドン中で、引張風になつていらつしやるんですつてね。

ホバー。さすがにロンドンは大都會です。ロンドンの人達はシドニーの人達のやうに、交際嫌ひではございませんな。

パアリック公爵夫人。私達はあなたのことをよく存じて居りますのよ。ホバーさん。あなたのやうなお方もつと外にも多勢おいでになると、世の中といふものは、もつと氣樂になりませうにね。ホバーさん、あなたは御存じであらつしやいませうが、アガーザと私はアウストラリアの事に、大變興味を持つて居りますの。あの愛らしい、小さなカンガルが飛び廻つて居たら、さぞ

面白いでございますね。アガーザはアウストラリアを地図で見つけたので
すつて。何といふ不思議な格構をして居るのでせう！ ちやうど大きな靴の
やうでございますね。ですが、あれはつひ近頃、開けた土地なんですから
せう？

ホバー。アウストラリアだつて、何處の土地だつて、同じ時代に出來たもので
はございませんか？ 奥さん。

バアリツク公爵夫人。まあ、うまい事をおつしやいますこと。あなたは獨特の
頓智を持つてゐらつしやるのね。でも私の側へばかりお引とめしてはなりま
せん。

ホバー。奥さん、私はアガーザさんと御一緒にダンスが致したうございます。
バアリツク公爵夫人。さあ、あの子もまだ踊るつもりなのでございませうよ。

アガーザや、お前まだ踊るのだらうね？

アガーザ嬢。はい、お母さま。

バアリツク公爵夫人。これからすぐに踊るのかい？

アガーザ嬢。はい、お母さま。

ホバー。では御一緒に願ひたいものですが。

(アガーザ背く)

バアリツク公爵夫人。ホバーさん、此の子はおしやべりでございますから、ど
うぞお氣をおつけなすつて。

(アガーザとホバーは舞踏室へ行く)

(ウキンダミーヤ卿上り登場)

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、ちよつとお前に話がある。

ウキンダミーヤ夫人。まあお待ち下さいまし。

(音楽止む)

バーカー。アウガスタス、ロートン卿。

(アウガスタス卿登場)

アウガスタス。奥さん、今晚は。

バアリツク公爵夫人。ジエームスさん。私を舞踏室へお連れ下さいませんか。

アウガスタスとは今晚一緒に御飯を食べましたので、差當りアウガスタスの相手はもう澤山でございます。

(ジエームス、ロイストンは公爵夫人と手を組んで、舞踏室へ連れ立つて行く)
バーカー。アーサー、ポータン様、竝に御夫人、ベースレー卿、竝に御夫人、
ダーリントン卿。

(これ等の人々バーカーの臺辭につれて登場)

アウガスタス。(ウキンダミーヤ卿に近寄り乍ら)ちよつと君に折入つて話したい事があるのだがねえ。僕は見る影もなく瘦せてしまつたよ。ねえ君、さうは見えないかい? 僕等は仲々實際の通りには見えないものだて。だからほんたうに困つちまふ。話と言ふのは他の事でもないんだが、あの女は一體何者だい? 何處から來たんだい? 何故あの女には一人も身寄りがないのだらう? 親類なんていふものは、どうせ碌なものぢやないけれど、それも、そんなものがあれば世間では信用するからなあ。

ウキンダミーヤ卿。君はアーリン夫人のことを言ふのかね? 僕はやつと半年前に會つたばかりなのだ。それまではあの女の事なんぞちつとも知らなかつたんだ。

アウガスタス。でもそれから後あの女とは、ちよいちよい會つて居るんだらう。

ウキンダミーヤ卿（冷淡に）うん、その後はあの女と度々會つて居る。今も會つて来たばかりなのだ。

アウガスタス。あゝ、さうだつたか！ だが女共はみんなあの女を悪く言つて居るせ。今夜も僕はアラベラと一緒に食事をしたが、まああの女は、アーリン夫人に就いてどんなことを言つたと思ふ？ 殆どあの夫人を完膚なきまでにこき呷したものだ——（横を向いて）僕とパアリックとは、アラベラに、そんな事はどうだつていゝ、要するにあの夫人は極めて立流な容貌を持つて居るんだから、と言つてやつたんだ。すると君、アラベラがどんな顔付をしたと思ふ？—— 處で一寸聞いて呉れ給へ。僕はアーリン夫人をどうしていゝ

かわからないが、ことによるとあの女と結婚するかもしれないよ。何しろあの女は僕をたまらなく冷淡に取扱ふんだからね。それにあの女は恐ろしく伶俐だ。あの女はどんな事でも承知して居る。君の事もちやんと承知して居る。色々と違つた方面から君のことをちやんと説明して居るんだ。

ウキンダミーヤ卿。アーリン夫人と僕との友情に就ては、別に何等の説明もいらないのだ。

アウガスタス。ふん、まあ、いゝから聞き給へ。君はあの女がこの社交界と呼ぶ厄介な場所へ、顔を出すと思つてゐるのかい？ 君はあの女を奥さんに紹介したいのかい？ 何もそんなに廻りくどいことをするにも及ばないぢやないか。君はそんな事がしたいのかね？

ウキンダミーヤ卿。アーリン夫人は今夜此處へ来るのだ。

アウガスタス。君の奥さんはあの女に招待状を出したのかね？
ウキンダミーヤ卿。アーリン夫人は招待状を受取つたのだ。

アウガスタス。それぢや、あの女はやつて来るだらう。然し君はなせその事を
前以つて話してくれなかつたのだね？ 話して呉れよば、僕も餘計な心配を
しないで済んだのだ。

(アガーザとホバーとは背後を横ぎつて、見晴しし、U、Eに出る)
バーカー。セシル、グレーム様。

(セシル、グレーム登場)

セシル、グレーム。(ウキンダミーヤ夫人に挨拶してその前を過ぎ、ウキンダミ
ーヤ卿と握手をする) アーサー、今晚は。なせ君は僕の健康を尋ねて呉れな
いのだ？ 僕は人から自分の健康を聞かれるのが好きなんだよ。さうされる

と、みんなが自分の事を心配してくれる事が知れて大に愉快なのだ。所で、
今夜は體の工合がちつとよくないんだ。僕は内の者と一緒に食事をして来た
のだが、内の者といふものはどうしてあんなにつまらないのだらう？ 親父
は相變らず食事の後で御説教をやるだらうぢやないか。僕は親父に、あなた
はもう少しものがわかつてもらいたい、年頃だとさう言つてやつたよ。だが僕の經
験によると、人間はものがわかりかけてもいゝ年頃になると、豈圖らんやす
つかり毫碌して了ふのだ。おい、タビー！ 君はまた結婚するんださうだ
ね。あんな遊戯には、大概あきて居さうなものだがね。

アウガスタス。くだらん事を言ふなよ。ほんたうにくだらん！

セシル、グレーム。ついでにちよつとお尋ねするが、えゝと、どつちだつたら
う？ 君は二度結婚して、一度離縁したのだつたかね？ それとも二度結婚

して一度離縁したのだつたかね？ 二度離縁して一度結婚したのだらうな。どうもその方がほんたうらしい。

アウガスタス。僕は非常に記憶が悪いから、どつちだかはつきり覚えて居ないよ。(Rへ去る)

ブリムデール夫人。ウキンダミーヤさん、私、あなたに折入つてお話し致したいことがございますの。

ウキンダミーヤ卿。まことに勝手にございますが、只今ちよつと妻の處へまゐらなければなりません。どうぞ御免下さい。

ブリムデール夫人。まあ、あなた、そんな事を決してなさるものぢやございませぬよ。當節は、殿方が大勢の前で奥さんを大切になさると、とんだ誤解を受けるものでございますよ。そんな男はきつと二人ぎりの時には、奥さんを

なぐるのだらうなんて、世間の人達から思はれますよ。夫婦仲が睦じさうに見えやうものなら、世間はそれを妙に疑ふんですから。まあ、そのことはいづれ晩餐を頂き乍らお話しいたしませうね。(舞踏室の扉の方へ行く)

ウキンダミーヤ卿 (Cの位置) マーガレット、私は是非ともお前に話をしなければならぬ。

ウキンダミーヤ夫人。あなた、この扇を持つて居て下さいませんか。ダアリントンさん、ありがたう。(ダアリントン卿の處へ行く)

ウキンダミーヤ卿。(夫人の側へ来て) マーガレットや、お前へさつき食事の前に言つたことは、あれは無論嘘なんだらうね。

ウキンダミーヤ夫人。あの女は今夜参りは致しますまい。

ウキンダミーヤ卿 (R、C、の位置) アーリン夫人は此處へ来るのだ。若しお

前があの夫人を恥かしめたり何かすれば、それは結局私達の恥辱になり苦痛になるのだよ。それをどうかよく覚えて居てお呉れ！ いゝかい、マーガレット！ どうぞ私を信用してくれ！ 妻は常然夫を信用す可きものだ。

ウキンダミーヤ夫人（Cの位置） ロンドンには夫を信用して居る女が大勢居りますわ。一目でそれがわかるんですの、その女達は非常に不幸に見えますから。私はさう言ふ女達になりたくありませんわ。（立ち上る）ダーリントンさん、どうぞ私の扇を返して下さいましな。ありがたう——扇といふものは重寶なものでございますわね。さうちやなくつて。——私は今夜はお友達が欲しいのです。ダーリントンさん、私はこんなに早くお友達が欲しくならうとは思ひませんでしたわ。

ダーリントン卿。奥さん！ かう言ふ時が何時か来るだらうと思つて居りまし

たが、然しどうして今夜？

ウキンダミーヤ卿。夫人に知らせてやらうさうしなけりやならない。騒ぎが

起つたら大變だ。マーガレット——

パーカー。アーリン夫人。

（ウキンダミーヤ卿吃驚して立ち上る。アーリン夫人登場、極めて派手な服装、至つて嚴かに。ウキンダミーヤ夫人扇をしつかり握らうとして床に落とす、さうしてアーリン夫人に冷淡な挨拶をする。アーリン夫人は丁寧に禮を返して、室内に歩みを運ぶ）

ダーリントン卿。奥さん扇をお落しになりましたよ。（扇を拾つて、ウキンダミーヤ夫人に渡す）

アーリン夫人（Cの位置） ウキンダミーヤさん、御機嫌よろしうございます。

何といふ御綺麗な奥さんでございませう！ まるで繪でございませうねえ。
ウキンダミーヤ卿。(低い聲で。)あなたが此處へいらつしやるのは無謀なこと
です。

アーリン夫人。(微笑しながら。)いえ、私のした事の中では一番いいこと
でございましたわ。さうしてあなた、どうぞ今夜私によく氣をつけて下さい
まし。私は御婦人の方々が氣になりますの。あなたは私を御婦人の方々に、
ひき合せなすつて下さいましな。男の方ならば何時でもお相手が出来ます
けれどね。アウガスタスさん、御機嫌よろしうございます。さつぱりお見えに
なりませんのね、私は昨日からあなたにお目にかゝりませんわ。あなたは
情なお方なのね、みんながさう申しますわ。

アウガスタス卿。(Rの位置)アーリンさん、さあ、その事は一寸説明させてい

たいただきたいのですが。

アーリン夫人。(R、C、の位置)お止めなさいましよ、アウガスタスさん。説
明するなんてあなたの柄にない事なんですわ。其處があなたの愛嬌なん
ですもの。

アウガスタス卿。やあ、もし私に愛嬌があると思召すなら――

(二人互に話をしてゐる。ウキンダミーヤ卿は心配さうに部屋の中をぶらつき
ながら、アーリン夫人を見守つてゐる)

ダーリントン卿。(ウキンダミーヤ夫人に向つて)あなたは大層顔色がお悪い
やございませんか。

ウキンダミーヤ夫人。憶病者は何時も青い顔をして居ります！

ダーリントン卿。あなたは眩暈がなされるやうですね。見晴しへ出やうぢやござ

いませんか。

ウキンダミーヤ夫人。はい、(パーカーに向つて)パーカーや、私の外套を出しておくれ。

アーリン夫人。(ウキンダミーヤ夫人の方へ行き乍ら)奥さん、見附しの灯がきら／＼と光つて、ほんとうに綺麗でございますこと。羅馬のドリア公爵のお宅を思ひ出しますわ。

(ウキンダミーヤ夫人冷淡に背いて、ダーリントン卿と共に去る)

おや、グレームさん、御機嫌よろしう。ジェットバラ夫人はあなたの叔母さんでゐらつしやいますの？ あの方とお近付きになりたうございますわ。セシル、グレーム。(一寸躊躇して迷惑さうに)あゝ、よろしうございます、お望みなら、御紹介いたしませう。カローリンの叔母さん、アーリン夫人を御

紹介いたします。

アーリン夫人。奥さま、お目にかゝれて嬉しうございます。(彼女と並んでソファに腰をかける)あなたのお甥御様と、私とは親友でございますの。私はこの方の政治上の經歷に、大變興味を持つて居ります。きつとこの方は偉大な成功をなさいますわ。あの方は保守黨の思想を持つていらしつて、しかも急進黨の様な辯舌をもつてゐらつしやいます、それが今日の時勢では何より大切な事でございますわ。ほんたうにあの方は素晴らしい雄辯家でいらつしやいますのね。私共は、あの方が誰方から雄辯を受つただかよく存じて居りますわ。昨日も公園でアランデル卿が噂をなすつてゐらつしやいましたわ。グレームさんの話振りは、叔母様にそっくりでゐらつしやいますつて。

ジェットバラ夫人(Rの位置)さうおつしやられると、ほんたうに嬉しうご

ございますわ！(アーリン夫人微笑する、さうして會話を続ける)

ダンビー(セシルグレアムに向つて)君はアーリン夫人をジェットバラード夫人に紹介したのかい？

セシルグレアム。うん、紹介した。しないわけに行かなかつたんだ。あの女は人を自分の思ふ通りにしてしまふ、どうも不思議だ。

ダンビー。あの女につかまつたら大變だなあ！(ブリムデール夫人の方へぶらついて行く)

アーリン夫人。(Cの位置。ジェットバラード夫人に向つて)木曜日でございますね？ えゝ是非(立ち上つて、笑ひ乍らウキンダミーヤ卿に話しかける)あんな年寄りの後家さんに禮儀を盡すなんて、ほんたうに面倒臭いわ！ でもあの人達は年中禮儀をやかましく言つて居るんですのね。

ブリムテール夫人。(ダンビーに向つて)あの、ウキンダミーヤさんと話をしてゐる立派な服装をしてゐる方は誰方でせう？

ダンビー。ちつとも御存じないのですか！ あの女はちよつとイギリス人向きにこしらへた、いかゞはしいフランス小説の特製本のやうですな。

アーリン夫人。ダンビーさんはブリムデール夫人と話をしてゐるのかしら？

あの夫人は恐ろしくダンビーさんを妬いて居るんですつてね。あの人は今夜は餘り私のそばに寄り付かないやうだ。あの人はきつと夫人を怖がつてゐるんだわ。あの柔のやうな色をした婦人達は怖い人達ですものね。ウキンダミーヤさん、私は始めにあなたと一緒に踊りませう。(ウキンダミーヤ卿唇を噛んで顔を曇める)さうするときつとアウガスタスさんが妬きますわ。アウガスタスさん！(アウガスタス卿は彼女のそばに来る)ウキンダミーヤさんが

ね、最初に私と踊らうと言つて承知なさらないの、今夜はあの方が御主人なのだから、おことはりするわけには参りませんわ。私は直ぐにもあなたと踊りたかつたんですのに。

アウガスタス卿（丁寧に頭を下げて）是非さう願ひしたいものです。

アーリン夫人。あなたは何にも彼も御承知であらつしやるのでせう。あなたとなら何時まで踊り續けても少しも飽きない人があるんですよ。

アウガスタス卿。（手を白いチョッキの上に置いて）あゝありがたう、ありがたう、あなたはすべてのレデーの中で、最も尊敬すべきお方です。

アーリン夫人。まあ嬉しいことをおつしやるわね。淡白で、實意があつて。私は丁度さうしたことを云はれるのが大好きですの。さあ私の花束を持つて下さいな。（ウキンダミーヤ卿の腕に寄りて舞踏室へ行く）あら、ダンピイさん

御機嫌よろしう。此の間は三度とも留守に致しまして大層失禮いたしました。金曜日に御飯を差上げますからいらつしやいましたな。

ダンピイ。（ひどく冷淡に）やあ、ありがたう。

（ブラムデール夫人目を光らせてダンピイを睨む。アウガスタス卿花束を持ち乍ら、アーリン夫人とウキンダミーヤ卿に従つて舞踏室に行く）

ブラムデール夫人。（ダンピイに向つて）あなたは何といふ卑しい方でせう！

あなたのおつしやる事は一つだつて信じられませんわ！ あなたはあの女を知らないつて私におつしやつたぢやありませんか、あなた、どう言ふお積りで、あの女を三度も續けてお訪ねになりましたの？ あなたはあの女の家へ呼ばれていらしつてはなりません。無論そんな事は御承知でせうねえ。

ダンピイ。ローラさん、呼ばれて行かうなんて、夢にも思つて居やしません

よ。

ブリムデール夫人。あなたはまたあの女の名前を聞かせて下さらないぢやありませんか、あの女は何といふ名?

ダンビイ。(軽く咳をして、髪の毛を撫でながら)アーリシ夫人と言ふ方です。

ブリムデール夫人。あの女が!

ダンビイ。さうです、みんながさう呼んで居ります。

ブリムデール夫人。それは面白いこと!ほんたうに面白いわ。ではもつとよく見てやりませう。(舞踏室の入口に行き、中を覗き込む)私はあの女について色々の怖ろしい話を聞いて居ます。なんでもあの女はウキンダミーヤさんといふ喰ひものにして居るのださうです。さうしてまあ、ウキンダミーヤの奥さんは何だつて御丁寧にあの女を招待なすつたのだらう! 何といふ面白い

ことだらう! 餘程人のいゝ女でなければ、あんな馬鹿げた事は出来はしないわ。あなたは金曜日にあの女の處へ行くんでせうね!

ダンビイ。何故です?

ブリムデール夫人。私はあなたに私の夫を連れて行つて貰ひたいの。あの人は此頃私のそばにへばり着いて居て、ほんたうにうるさくつてしやうがないのよ。あの女ならちやうどあの人にお誂へ向きだわ。あの人はあの女がいやと言ふまではそばについてるでせうし、さうなれば私の邪魔がなくなりますわ。私あゝいふ種類の女は非常に必要だと思ふわ。あゝ言ふ人達が私達の結婚の土臺になるのだわ。

ダンビイ。あなたは不思議なお方ですな!

ブリムデール夫人。(男の顔をちつと覗めて)あなたも不思議な方だといゝんで

すけれど。

ダンビイ。私も——自分に丈けは不思議な人間に思はれます。私が世界中で充分に知り盡したいと思ふのは、この私といふ人間です。然し今の處どうしてもその機会がないのです。

(二人は舞踏室に入る。ウキンダミーヤ夫人とダーリントン卿とが見晴しから入つて来る)

ウキンダミーヤ夫人。え、あの女が此處へ来るなんて飛んでもないことですわ。私にはとても我慢が出来ませんわ。あなたがさつき、お茶の時間におつしやつた言葉の意味がやつとわかりましたわ。何故あなたははつきりとおつしやつて下さりませんか？ おつしやつて下さればよかつたのに！

ダーリントン卿。それは私には出来ませんでした！他人の事をさういふ風に話

すわけには行きませんが今夜あの人があの女を此處へ呼ぼうとして居る事がわかつて居たら、その積りで私もあなたにお話ししたかも知れませんが。さうすれば兎も角あなたは恥を掻かないで済んだでせう。

ウキンダミーヤ夫人。私があの子を呼んだのはございませぬ。夫が是非あの子を呼べと申しまして、私の頼みも私の申付けも聞いては呉れなかつたのです。あゝ、私の家は汚されて了ひました。あの女が私の夫と踊り始めたら、私はみんなに笑はれるでせう？ 私は一體何のお蔭で、こんな侮辱を受けるのでせう？ 私は夫に自分の生涯を悉く捧げて了ひました。それなのに夫はそれを自分のものにして、いゝ様に利用して、めちやめちやにしてしまつたのです。私は自分にさへ淺ましい人間に見えますわ。けれども私には勇氣がありませんわ、私は憶病なんですもの、(ソープアに腰をかける)

ダーリントン卿。いや、あなたとしては、さういふ夫と同様してゐらつしやる事は出来ないでせう。あの人と一緒にゐらしたつたら、あなたの生涯はどうなる事だせう、あなたは夫が年中自分に嘘をついて居ると思ふやうになりませう。あなたは夫の目付でも、言葉でも、接吻でも、感情でも、みんな嘘だと思ふやうになるでせう。夫が他の女に飽きると、あなたは夫を慰めてやらなければならぬ。夫が他の女に溺れて居ても、夫が歸つて来ればあなたは夫の御機嫌をとらなければならぬ。あなたは夫の實生活の假面に使はれ、夫の秘密を隠す覆にされて了ひます。

ウキンダミーヤ夫人。ほんたうにおつしやる通りでございます——怖ろしい事ですが、あなたのおつしやる通りです。ですが私は誰方を頼りとしたらいいのでございませう。ダーリントンさん、あなたは私の友達になつて下さると

おつしやいましたね！ 私はどうしたらいいのか教へて下さいまし。さあ、どうぞ私の友達になつて下さいまし。

ダーリントン卿。男と女との間には、友人関係といふものはないのです。其處には熱情とか、敵意とか、崇拜とか、戀愛とかあるばかりです。然し友人関係といふものはありません。私はあなたを愛して居ります——

ウキンダミーヤ夫人。いゝえ、いゝえ！（立ち上る）

ダーリントン卿。私はあなたを愛して居ります！ 私にとつてはあなたは全世界の何ものにもまして尊いものです。あなたの夫は何をあなたに與へたでせうか、何も與へたものはないぢやありませんか、あの人を持つて居るものは、皆あの忌はしい女に與へられて了つたのです。あの人はその女をあなたの宴會へ、あなたの家庭へ連れ込んで来て、しかも皆の前であなたに恥を擡

かせたではありませんか。私はあなたに私の生命を捧げます。

ウキンダミーヤ夫人。ダーリントンさん！

ダーリントン卿。私の生命——私の全生命を捧げて居ります。この生命を捧げますから、どうぞ御自由になすつて下さいまし——私はあなたを愛して居ります、——私はあなたを愛する程にこれまで誰をも愛したことはございません、私はあなたにお目にかゝつた瞬間からあなたを愛して居りました、盲目的に崇めるやうに熱烈にあなたを愛して居りました！ あなたはその時それを御存じなかつたのでせう——然しあなたは今こそそれがおわかりになつたでせう。今夜のうちに此の家を立退いておしまひなさい、私は決して世間の思惑などはどうでもよいとは申しません。世の取沙汰や、社會の批評は貴重大なことです。然し人間といふものは、完全に、充分に、徹底的に生活をす

るか——それとも偽善に満ちた世間の掟に従つて、虚偽な、淺薄な、墮落した生活をするか、二つに一つを撰ばなければならぬときに立ち至ることがあります。今あなたはその瞬間に立つてゐらつしやるのです。さあ、あなたは二つのうちを撰ばなければなりません。さあ、どちらをお取りになりますか。

ウキンダミーヤ夫人。(徐かに男のそばを離れながら、昂奮した目付でちと男をみつめて) 私にはその勇氣がございません。

ダーリントン卿。(女の後を追ひながら) いゝえ、あなたは勇氣を持つてゐらつしやいます。この後半年の間は苦しい事もございませう、いやそれ所か、不名譽な事もございませう。然しあなたがあの人の姓を捨て、私の姓を名乗る時が来れば、何も彼もうまくまゐります。マーガレット、私の戀人、私の

妻、——さうです、何時かあなたは私の妻になるのです。あなたはほんたうに私の妻です。あなたはきつと御承知の筈です、あなたは現在どういふ立場にゐらつしやるのですか。當然あなたに屬して居る地位を、あの女がとつて了つたのではございませんか。さあ！ 出ておしまひなさい、悠々と大手を振つて、口元に微笑を含んで、勇氣に満ちた目付をして、この家を出てお了ひなさい。あなたが家出をなさる譯はロンドン中の人を知つて居ります、誰があなたを悪く申しませう。そんな事を言ふ者は一人も居りません。萬一鬼や角言はれた處で、それが何でせう。何が悪いことがございませう。悪いのは男の方です、卑しい女に妻を見替へた男の方が悪いのです。さう言ふ夫と同棲して居れば女の方が悪いのです。あなたは此の間、物事に對して一歩も假借しないとおつしやいましたね。今こそ假借をなすつてはいけません。勇

氣をお出しなさいまし。何處までも我をお通しなさい。

ウキンダミーヤ夫人。私は我を通すのが怖ろしうございます。どうぞ考へさして下さいまし。待たせて下さいまし、私の夫は私のものになるかもしれませんわ。(ソープアに腰をかける)

ダーリントン卿。するとあなたはあの人を取返したいと思つてゐらつしやるのですか。私はあなたを買被つて居りました、あなたは矢張り世間並の女であらつしやる。あなたは世間の賞讃などは、眼中に置かないとおつしやりながらそのくせどんな辛い目に逢つても、世間の批難は避けようとしてゐらつしやる。一週間もたてば、あなたはあの女と一緒に公園を馬車で乗り廻すやうになるでせう。あの女は毎日のやうにあなたの處へやつて来て——あなたの親友になるでせう。あなたはこのやうな關係を一息に断ち切らうとなさらな

いで、どんなことでも辛棒しようとしてゐらつしやる。まあそれで結構でございます、あなたはちつとも勇氣がおあんなさらない！

ウキンダミーヤ夫人。あゝ、どうか私に考へる時間を與へて下さい。私は直ぐに御返辭は出来ません。(震へる手先で額を押さへる)

ダーリントン卿。直ぐにでなければもう駄目です。

ウキンダミーヤ夫人。(ソープアから立ち上つて) そんなら駄目でも仕方がございませんわ！(間)

ダーリントン卿。あなたはちつとも私の心を察して下さらない！

ウキンダミーヤ夫人。私の心はもうとうに破れて居ります。(間)

ダーリントン卿。私は明日英國を立去ります。これがあなたにお目にかゝる最後でございます。あなたは二度と再び私に逢ふ事はございますまい。我々の

生命は、我々の魂はたつた一瞬間觸れ合つたばかりでした。もう決して觸れ合ふ時は参りません。さようなら、マーガレット。(退場)

ウキンダミーヤ夫人。私は生涯獨りぼつちだ！何と云ふ恐ろしい事だらう！

(音楽止む。パアリック公爵夫人と、ペースレー卿とが笑ひ乍ら話をし乍ら登場する。續いて他の客もぞろ／＼と舞踏室から登場。)

パアリック公爵夫人。マーガレットさん、私は今アーリン夫人と大變愉快な話をして居ましたの。私はあの方の事についてさつきあなたに濟まない事と云つて了ひましたわ、あなたが招待なすつた位ですから無論あの夫人に悪い處などはありませんわ。世間の事をちやんと心得た、仲々人を惹きつける方ですわねえ。あの方は一度以上結婚した者は非常に厭ひなんですつて、だからアウガスタスの事はもう大丈夫ですわ。どうして世間ではあの方の事を悪く

言ふのでせう。あの厄介な私の姪達——あのサビーユの女どもは始終人の悪口を言つて居るんですからね。でも私ならば矢張りハンプブルグへ行きますわ、私ほんたうに行きますわ。あの夫人は魔力があり過ぎるやうですから、だがアガーサは何處へ行つたんだらう？ おや、あすこに居る。

(アガーサとホバーとが見晴しL、U、E、から登場)

ホバーさん、私は随分怒つて居りますよ。あなたはアガーサを見晴しへ連れ出してお了ひなすつたのね、あの子はほんたうに繊弱いのですのに。

ホバー(L、Cの位置) いや、何とも申譯がございません。私達は一寸あちらへ行つて、それから一緒にお話をして居たのでございます。

パアリック公爵夫人。(Cの位置) またアウストラリアの事でせうね？

ホバー。はい、さやうです。

パアリック公爵夫人。アガーザやー(娘を招く)

アガーザ嬢。はい！

パアリック公爵夫人。(傍白)ホバーさんは何か改まつておつしやつたかい。——

アガーザ嬢。はい

パアリック公爵夫人。さうしてお前はどんな返事をしたの？

アガーザ嬢。はい

パアリック公爵夫人。(愛撫するやうに)ねえ、お前、お前はいつも間違つたことを言ひはしないねえ。ホバーさん！ ジェームス！ アガーザがすつかり私に打明けてしまひましたわ。あなた方はうまく隠していらつしやいましたのね。

ホバー。奥さん、それではあなたは私がアガーザさんをアウストラリアへ連れ

て行つてもよろしうございますか。

バアリック公爵夫人。(腹立たしげに) アウストラリアへ? あんな怖ろしい、
下等な土地の事はおつしやらないで下さいまし。

ホバー。でもアガーザさんは一緒に行きたいとおつしやいました。

バアリック公爵夫人。(怖い顔をして) アガーザや、お前はそんな事を言ひまし
たか。

アガーザ嬢。はい

バアリック公爵夫人。アガーザ、お前は何といふ馬鹿な事を言ふのでせう。

ロスブナ、スクエアの方がまだしも住むにはいゝ處だよ、あすこにも随分下
等な人達が住んで居るけれど、でも怖ろしいカンガルーなんかは這ひ廻つて
居やあしないわ。まあ、そんな事は明日ゆつくり話させう。ジエームス、

アガーザと一緒にお歸りなすつてもようございます。あなたは勿論私の宅へ
お晝においで下さるでせうね。二時ではいけませんよ、一時でございます
よ。公爵があなたにお話があるらしようございますから。

ホバー。奥さん、私も公爵にお話が致したのでございますが、公爵はまだ私
に一言もお話し下さつたことではございません。

バアリック公爵夫人。明日はきつとあなたにいろ／＼お話があるだらうと存じ
ますわ。(アガーザ、ホバトと共に退場) では、マーガレットさん、今晚はこ
れで失禮いたします。古くさいお話でございますが、一目惚れの戀よりも、
シーズンの終りに氣心を知り合つてする戀の方が、尙更思ふ通りに參るもの
でございますわね。

ウキンドグミーヤ夫人。奥さん、お休みなさいまし。

(パアリック及爵夫人は、ベースレー卿の腕に倚つて退場)

ブリムデール夫人。お宅の御主人は何といふ綺麗な方とダンスをしてゐらつしやるのでせう！ 私があなただつたら、ほんとうに氣がもめますわ！ あの
お方はあなたの御親友でゐらつしやるの。

ウキンダミーヤ夫人。どう致しまして！

ブリムデール夫人。まあ、さうなの。ではお休みなさいまし。(ダンピイを見乍ら退場)

ダンピイ。あのホバーといふ男は大變な人間ですな。

セシル、グレーム。いや、ホバーは野生の紳士です。僕の知つて居る最も悪い紳士のタイプだ。

ダンピイ。ウキンダミーヤ夫人は賢明な夫人だ。大概の夫人ならアーリン夫人

を拒絶するだらうに。然しウキンダミーヤ夫人は常識といふ頗る變つたものを持つて居られる。

セシル、グレーム。さうしてウキンダミーヤは無分別ほど無邪氣に見えるものはないといふことを知つて居るんだな。

ダレピイ。うん。ウキンダミーヤも大分近代的になりかゝつて居るぞ。あの男

があゝなると思ひがけない。(ウキンダミーヤ夫人に會釋して退場)

ワエツトバラ夫人。(ウキンダミーヤ夫人に向つて)奥さん、お休みなさい。

アーリン夫人は何といふ氣持のいゝ方でせう。あの方は木曜日に私の宅へいらつしやいますの。あなたもいらしやいませんか。きつと僧正やアーリン夫人もお見えになりますわ。

ウキンダミーヤ夫人。残念でございますが私、約束がございますの。

シエットバラ夫人。ほんたうに残念でございますわね。さあまゐりませう。
(シエットバラ夫人と、グレーム嬢退場)

(アーリン夫人とウキンダミーヤ卿退場)

アーリン夫人。面白い舞踏會でございましたこと。何だかいろ／＼昔の事を思ひ出しますわ。(ソーフアに腰をかける。)だけど、世間には何時も相變らず馬鹿な人達が居りますのね。世間はちつとも變らないけれど、マーガレットだけは例外ですわね。あの子はほんたうに美しい子になりました。私があの子を最後に見た時は——もう廿年も昔でございました。あの子はまだ赤ん坊でフラネルの中に包まれて居ました。ほんの赤ん坊でございましたの。それからあの公爵夫人にあの可愛らしいアガーザさん！ あれは私の大好きな令嬢のタイプでございます。ねえウキンダミーヤさんもし私があの子の公爵夫人の義

理の姉になるやうでしたら——

ウキンダミーヤ卿。(アーリン夫人の居るLに腰をかける。)ですが、あなたはほんたうに——？

(セシル、グレームは、他の客と共に退場。ウキンダミーヤ夫人は、嘲りと苦痛の目付でアーリン夫人と夫の様子を注意して居る。二人は彼女の居るのに気がつかないで居る)

アーリン夫人。明日の十二時にいらしやる等でございます。今夜結婚の申込みをしたがつていらしやいましたの。いゝえ實は申込みをなさいましたのよ。あの方はその事ばかり繰り返していらつしやいましたのよ。あなたはアウガスタスがどんなにくど／＼と、あの話をしたか御存じでせう。ほんたうに悪い辭ですわ。けれど私は明日にならなければ、返事が出来ないと申しました。

勿論私はあの人と一緒にならうと思つて居りますわ。私は立派な妻になつて見せます。アウガスタスさんには大變いゝ處がございます。幸ひにもそのい處は凡べて表に出て居りますわ。一體いゝ處と云ふものは皆表に出て居るものでございますからね。この事に就ては勿論あなたにも御助力を願はなければなりません。

ウキンダミーヤ卿。私にはアウガスタスさんを勵ます義務はないだらうと思ひますが？

アーロン夫人。さうですとも、それは私が勵まして上げます。ですがあなたは氣の利いた計らひをして下さいませうね。

ウキンダミーヤ卿（澁面をして）夫が今晚私に話し度と言つた事なのですね？
アーロン夫人。さうですわ。

ウキンダミーヤ卿。（ぢれつたさうな身振りをして）其話は此處では致ますまい。

アーロン夫人。（笑ひ乍ら）では其話は見晴で申し上げませう。用談をするにだつて綺麗な背景がなくてはなりませんからね。ねえ、さうでせう？ ウキンダ

ミーヤさん、適當な背景さへあれば女と言ふ者は何だつて出来る者ですわ。

ウキンダミーヤ卿。明日ではいけないでせうか。

アーロン夫人。いゝえ、私は明日あの人のお申込みを受るつもりでございますの。

私に財産があるとあの人に言ふ事が出来たら、大變都合だと思ひますわ。

さあ、何といつたものでせう？——例へばは、と、ことか、又二度目の夫とか、でなければ遠い親戚の人から二千ポンドづゝの仕送りがあるといふやうな事でもね。さうしたら尙更あの人を動かすだらうと思ひますわ。ねえさうでございませう？ 私の御機嫌をとるのには大變都合のいゝ時ですわ。だけどあな

たは御世辭をおつしやるのが御下手でございますことね。きつとマーダレツトがさういふよい習慣をあなたにすゝめないんでせうね。それは大變な間違ひですわ。人間が愉快な事を言はなくなれば、愉快な事も考へないやうになるのです。それはさうと眞面目なお話ですが、二千ポンドではどんなものでせう？ それとも二千五百ポンドでせうか。常節は、したのお金が大切でございますからね。ウキンダミーヤさん、あなたは世の中といふものを非常に面白い處だとはお考へになりませんか？ 私はさう思ひますわ！

(アーリン夫人ウキンダミーヤ卿と共に退場。舞踏室で音楽が鳴り始める。)
ウキンダミーヤ夫人。もう此の家にはゐる譯には行かないわ。私の愛してゐる人が、今夜私に、その全生命を捧げると言つたのに、私はそれをことはつてしまつた。私は何故あんな馬鹿な事をしたのだらう。私は今こそあの人に私

の生命を捧げてしまふわ。生命を捧げて、あの人の所へ行つてしまふ方がいゝわ！(外套を着て扉口へ行く。それから又歸つて来る。テーブルの側に腰をかけて手紙を認め、それを封筒に入れて机の上に置く)アーサーは決して私を理解しては居ないのだ。だけど之を讀んだらきつとあの人も氣がつくだらう。あの人はあの人で自分の好きな生活をするがよい。私は私で自分がいいと思ふ通りに、正しいと思ふ通りにやるんだわ。結婚の誓を破つたのはあの人だわ——私ではないわ。私は只其きづなを破る丈なんだわ。

(退場)

(パークーシより登場。舞踏室Rの方へ行く、アーリン夫人登場)
アーリン夫人。ウキンダミーヤの奥さんは舞踏室にゐらしやいますの？
パークーシ。奥様はたつた今お出ましになりました。

アーリン夫人。お出ましになつて？見晴しにでもあつしやるんぢやないの？
バーカー。いゝえ、奥様はたつた今お屋敷からお出掛けになりました。

アーリン夫人。(立上つて不思議さうにバーカーの顔を見る)お屋敷から？

バーカー。はい——奥様は殿様へおてたお手紙をテーブルの上に残して置いた
とおつしやいました。

アーリン夫人。ウキンドグミーヤさんに置手紙をなすつたのですつて？

バーカー。左様でございます。

アーリン夫人。あゝさう、どうもお世話さま。(バーカー退場。舞踏室の音楽や
む)家出をした！置手紙をした！(その側に行つて手紙を見る。一寸手に
取つて見てギョツとして再び手紙を置く)いえく——そんな事がある譯は
ない。あんな悲劇が世の中に度々起る譯がないわ！あゝ何だつてこんな恐

ろしい想像が私の胸に浮んで来るのだらう、忘れよう、忘れようと思つてあ
たのに、どうして私はあの時の事を今頃思ひ出したのだらう？本當にあん
な悲劇が世の中に度々あるものだらうか？(手紙の封をさいて中をよむ、氣
がもめてたまらないやうに椅子に腰を落とす)あゝ何といふ恐ろしい事だら
う！二十年前に私があの子の父親に書いた手紙と同じ文句だ！あの手紙
を書いた爲めに、私はこれ迄どんなにつらい報いを受けたらう！いやい
やあれはまだ報いではなかつたのだ。本當の報ひを今夜になつて受けたの
だ！(まだRに腰かけてゐる)

(ウキンドグミーヤ卿。L、U、Eに登場)

ウキンドグミーヤ卿。あなたは私の妻に暇乞ひをなさいましたか。(Cに来る。)

アーリン夫人。(手紙を手の中にもるめながら)はい申上げました。

ウキンダミーヤ卿。あれは何處に居りませうか？

アーロン夫人。大變疲れたとおつしやつて、今しがたお休みになりましたわ。頭痛がなさるつておつしやつてゐらつしやいました。

ウキンダミーヤ卿。では行つてまゐりませう。御免下さい。

アーロン夫人。(急いで立上る) いゝえ！ いゝえ御心配なさる程の事ぢやございませんの。只大變に疲れてゐらつしやいますの。それにまだお客様が食堂にお出なさいますので、どうぞあなたから申譯をして下さいとおつしやいました。どなたも来て下さらないやうに、静にしてお休みなさいたいんです。つて。(手紙を落とす) 私は奥様からあなたに言傳をたのまれましたの。

ウキンダミーヤ卿。(手紙を拾ひ取り) あなた御手紙をお落しになりましたよ。

アーロン夫人。あゝありがたう。私が落したんでございます。(手紙を受取らう

として手を差出す)

ウキンダミーヤ卿。(まだ手紙を見つめ乍ら) ですが、これはうちの妻の手ではございませんか？

アーロン夫人。(急いで手紙を取る) えゝ、それは——宛名でございませうの。ぞ私の馬車を呼びにやつて下さいませんか。

ウキンダミーヤ卿。かしこまりました。(工に行き退場。)

アーロン夫人。まあよかつた！ どうしたらいいだらう。どうしたらいいだらう。今迄には覚えのない事なのに、私には情愛が起つて來た。一體どうした譯だらう？ おの子にあれの母親のやうな眞似はさせられない——ほんたうに恐ろしい事だ。どうして助けたらいいだらう。どうしてあの子を助けたらいいだらう。この一刻が一生を過るのだ私こそ誰よりよく知つてゐる！ ウキンダミーヤを

何處かへ出してしまわなげや、それが何よりかんじんな事だ（Lへ行く）けれども、私どうしたらいいだらう？ まあ、どうかしてやつてのけなくちや。

あー

（アウガスタス卿花束を持ち乍ら、R、U、Eへ登場）

アウガスタス卿。もし、あなた私は氣がもめてたまりません。未だ御返事を聞かせては戴けませんか？

アーリン夫人。アウガスタスさん、まあお聞きなすつて下さい。あなたウキンダミーヤさんを直ぐにクラブへ連れて行つて、出来るだけ長くあそこにとめて置いて下さいましな。ね、ようござんすか。

アウガスタス卿。ですが、あなたは夜は早くきり上げるやうに仰つしやつたぢやありませんか。

アーリン夫人。（昂奮して）私の言ふやうになすつて下さい。私のいふやうになすつて下さい。

アウガスタス卿。さうすればお禮がいたいますか？

アーリン夫人。お禮ですつて？ お禮ですつて？ まあ！ それは明日になさいます。然しウキンダミーヤさんを今夜見失つてはいけませんよ。そんな事があると私はあなたを許しません。もう一度と再びあなたに口を利きません。もうあなたとは一切關係を無くしますわ。ウキンダミーヤをクラブへ止めて置いて今晚うちへ歸さないやうになさるのですよ。氣をつけて下さいましよ。（Lより退場）

アウガスタス卿。うん。もう亭主になつたも同然だ。べあたわい。

（ぼかんとして、アーリン夫人について行く）

第三幕

場面——ダーリントン卿の片室。暖爐Rの前には大きなソール
ファが置いてある。舞臺の後手に當つて窓にはカーテンが曳
いてある。扉L、同じくR、ペンや、インキが載せてあるチ
ーブルR、サイホンとコップと、タンタラス、フレームが載
せてあるテーブルC、葉巻と衆煙草が載せてあるテーブルL、
洋燈が付て居る。

ウキンドミィヤ夫人。(暖爐の前に立つて) 何故おの方はいらつしやらないだら
う? この待つ間の怖ろしいこと。いらしやらなければならぬのだが。ど
うしていらしやらないだらう。熱烈な事をおつしやつて、燃えるやうな思を

させて下さるのだのに。寒けがすること——戀も何も知らない人のやうに。
寒けがする。私は何だか寒くなつて來た。戀も何も知らない人間のやうに寒
けがする。もうアーサーはあの手紙を読んだに違ひない。私のことを何とか
思つてくれるなら、追つかけて來て、無理にも私を連れて歸る筈なのに、彼
の人は何とも思つては居ないんだ。彼の人はすつかりあの女の手管に乗せら
れて居る。いゝやうにされて居るのだ。男を自由にしようと思へばたゞ男の
弱點にさへ付入ればいゝ。私達は男を神のやうに立派にしようとする。だか
ら男はちき私達を見捨て、しまふのだ。他の女共は男を動物のやうに賤しい
ものにする。だからいつまでも男は側を離れないのだ。なんて怖ろしい世間
だらう。おゝ、こんな處へ來たのは狂氣の沙汰だつた。空恐ろしい狂氣の汰
沙だつた。愛してくれる男の玩具になると、女の名譽を汚す男の妻となる

のとどちらが悪い事だらう？ どんな女にその事がわかるだらう？ だが彼の人は始終私を愛してくれるだらうか？ 私は彼の人に生命までも捧げてしまはうとして居る。だけど私は彼の人に何を持つて来て上げたらうか。歎びの調を忘れた唇、涙に盲いた眼、冷めたい手、氷のやうに冷たい心——私は何も持つて来ては上げなかつた。私は歸らなけりやならない。いいえ、私は歸る事は出来ない。あの手紙のお蔭でどうにも動きがつかなくなつて了つた。アーサーは私を許しはしなからう。悪い手紙だつた！ いえ、ダーリントンさんは明日英國をお立ちになる。私も一緒に行かう。(些との間坐つて居て、また立上つて、上衣を着る) いや、いや、私は歸らう、アーサーはどうでもするがいい。私は此處に斯うしては居られない。此處へ来たのは狂氣の沙汰だつた。すぐ歸らなけりやならない。おや、ダーリントンさんがお出でになつたらし

い。どうしたらいいだらう。何と言つたものだらう。私を歸らしてくれるだらうか。男は残酷なもの、恐ろしいものと聞いて居る。おや(手で顔を隠す)
(アーリン夫人より入り来る)

アーリン夫人。ウキンダミーヤの奥さん。(ウキンダミーヤ夫人は驚いて見上げる) 間に合つてまあよかつたこと！ あなたはすぐ此れから旦那様の處へお歸りにならなければなりません。

ウキンダミーヤ夫人。どうしても？

アーリン夫人。(命令的に) さうですとも。一寸でも猶豫はなりませんよ。今にもダーリントンさんがお出でになるかもしれませぬ。

ウキンダミーヤ夫人。私のそばへゐらつしやつてはいけません。

アーリン夫人。まあ、あなたはもう一步で破滅の底に落ちてしまひます。恐ろ

しい絶縁の縁に立つていらつしやるのです。すぐ此處をお退きなさい。私の馬車が外に待たせてあります。私と一緒ににお出でなさいまし。眞直にお宅へお歸りなさらなければいけません。(上着を脱いで、ソファの上に投げかける) 何をなすつてゐらつしやいますの。

ウキンダミーヤ夫人。あなたが此處へいらつしやらなければ私は宅へ歸つたでせうに。けれどあなたにお目にかゝた上は、もうどうあつてもウキンダミーヤの處へは歸られません。あなたは随分無鐵砲な事をなさるんですね。何だか無暗に腹が立ちますわ、あなたが此處へいらつした理由もよく分つて居ます。夫があなたを此處によこしたのは、私をだまして連れ戻すためです。私をあなたと夫との關係を包む目隠しにしやうと言ふのです。

アーリン夫人。そんな事があるものでせうか。

ウキンダミーヤ夫人。私の夫の處へお歸り下さい。アーリンさん、彼の人はあなたのものです。私のもではありません。彼の人は世間の誹謗を恐れて居るのです。男といふものはそんなに臆病なのです。世間の法律を犯して置き乍がら人の口を恐れて居るのです。夫は覺悟した方がいゝでせうよ。どうしたつて誹謗は受けなければなりませんからね。ロンドン中の大評判になつていい物笑ひになるのです。悪徳新聞には書き立てられる。私の名が貼紙に出る。アーリン夫人。いえ——いえ——

ウキンダミーヤ夫人。さうですとも。ウキンダミーヤが迎へに来てくれたら、私はあなたとウキンダミーヤが仕組んで置いた自墮落な家庭へ戻つて行つたでせう——戻つて行くつもりでした。だけれどウキンダミーヤが家に居てあなたを迎へよこすなんて——まあ！ 何と言ふ不埒な事だせう。不埒ですわ。

アーリン夫人。(C) ウキンダミーヤの奥さん、あなたは大變私を恥しめるといふものです。御主人を大變恥しめるといふものです。彼の方はあなたが此處に居らしやるのを御存知ないのです。おうちに居らしやるものと思つて居らつしやるのです。あなたの御手紙は讀んではゐらつしやらないのです——あの無分別な御手紙は。

ウキンダミーヤ夫人。(R) 讀んで居ないのですつて——

アーリン夫人。え、ちつとも御承知ないのです。

ウキンダミーヤ夫人。随分私を甘く見てゐらつしやるわ。(アーリン夫人の方へ行き) あなたは嘘をついてゐらつしやるのですね——

アトリー夫人。(自分を制しながら) 嘘ではございまん。ほんたうの事を申し上げて居るのですわ。

ウキンダミーヤ夫人。手紙を見ないで、どうしてあなたが此處へおいでになつたのでせう。私が此處へ來た事を誰方からお聞きになつて？ 夫からでせう。

私をつれ戻しに夫があなたをよこしたのでせう。(Lを横切る)

アーリン夫人。御主人はあなたのお手紙を決してご覽にはなりません——私が開けて見たのです。私が——讀んだのです。

ウキンダミーヤ夫人。(アーリンの方を向いて) 私の手紙を開けてごらんになつたのですつて。まさか——

アーリン夫人。まさかですつて—— まあ—— あなたを破滅の淵から救ひ出さうためなら、どんな事だつて致しますわ。お手紙は此處にございます。御主人は決して御覽にならないのです。どうしてお見せ申すことが出来ませう。(ストオプのそばへ行き) こんなものはお書きなさる筈はなかつたのです。(手紙

を破つて火に投げる)

ウキンダミーヤ夫人。(聲と態度に非常な輕蔑を含めて)其手紙が私のだかどうだか分つた者ぢやありませんわ。そんな甘い手で私がだませるとお思召して？
アーリン夫人。どうして、私の申すことをさうお疑ひなさるのでせう？私がどういふ目的でこちらへ上つたとお思つて居らつしやいますの？とり返しのかない破滅からあなたを救ひ出さう。怖ろしい勘違ひからあなたをお救ひしやうと思ふばかりに参つたのでございますよ。いま燃した手紙はあなたの御手紙でございます。私はあなたにお誓ひ致します！

ウキンダミーヤ夫人。私に見せて下さらないで、燃してお了ひなさるなんて、まあまくたくらんだものですよわね。私にはあなたが信じられません。あなたの全生涯は偽りです。一つだつてあなたに本音が仰つしやられるものですか

？(坐る)

アーリン夫人。(あせつて)どうなりと御勝手に御考へなさいまし。どうなりと御好きなやうに悪口を仰つしやいませ。ですが兎に角、お歸りなさいまし。

あなたの愛して居らつしやる御主人のところへ。

ウキンダミーヤ夫人。(澁々顔で)私は夫を愛して居りません！

アーリン夫人。あなたは愛してゐらつしやる。あの方だつてあなたを愛してゐらつしやる。それはあなただつてよく御承知でせう。

ウキンダミーヤ夫人。夫は愛といふことを知りません。ちやうどあなたと同じやうに愛といふことを御存じないのです。あなたの御註文はちやんと心得て居りますわ。私を連れ戻せば囁御役に立つことではございませうよ。まあ！歸つたらどんな破目になることではせうね！慈悲も情も知らない女、見るさへ

穢らはしい、口をきくさへ忌はしい女、自墮落な女、人の夫を誘惑するやうな女のためにいゝやうにされるのです。

アーリン夫人。(當惑の表情をもつて) ウキンダミーヤさん、ウキンダミーヤさん、そんな怖ろしいことはおつしやいますな。どんなに恐ろしい事だか、どんなに怖ろしい、どんなに不正なことだか、あなたにはお分りがないのです。まあ黙つて私の申す事をお聞きなさいまし。御主人の處へお歸りにはりさへすればいゝのです。さうなされば、この末たとへどんな事があらうとも、私はあなたの御主人とはおつき合ひは致しますまい、あなた方のお邪魔はきつと致しますまい。成る程私はあなたの御主人からお金はいたゞきました。ですがそのお金は愛のためではございません。お憎しみから下さつたのです。私を恥かしめようと言ふので下さつたのです。御主人をいゝやうにする――

ウキンダミーヤ夫人。(立上り) それ御覽なさい。いゝやうにすると白狀してゐらつしやる！

アーリン夫人。左様でございます。ではその譯をお話しいたします。私にお金を下さつたのは御主人があなたを愛してゐらつやるからですよ。ウキンダミーヤさん。ゝ

ウキンダミーヤ夫人。さう思ひ込ませるお積りなの。

アーリン夫人。それを信じて頂かなければなりません！ ほんたうなのでございますから。さうなすつたのもあなたを愛してゐらつしやるからです。さあ、何とでもお好きなやうにおつしやいまし、壓制とでも、脅迫とでも、何とでも。ですがあなたを愛するからこそあのやうになすつたのです。あなたを恥辱と不名譽から救はうとしてゐらつしやるからです。

ウキンダミーヤ夫人。何とおつしやるのです？ まあ失禮な！ あなたなんかのお構ひなさることではないのです。

アーロン夫人。(卑下して) さうですとも、それはよく存じて居ります。ですが御主人はあなたを愛してゐらしやるのです。さう言ふ愛情は二度と得られるものではありません。断じてまたとはない愛情でございます。それをお捨てになつては、冥加が盡きてしまひますよ。さう言ふ愛情は二度とあなたには恵まれません。どんなに願つても恵まれません。アーサーはあなたを愛して居らつしやいますよ。

ウキンダミーヤ夫人。アーサー？ そんな呼び方をなすつて、それでもあなたはやましい事がないとおつしやるのですか。

アーロン夫人。ウキンダミーヤさん、御主人はあなたに對して何も罪を犯して

居りません、神かけてお誓ひいたします。さういふ誤解があなたのお胸に滲き上ると気がついたら、あなたのお邪魔をするどころか、私は一層死んでしまいます。死んで了ひます。喜んで死んでしまひます。(ソーフアRへ進む)

ウキンダミーヤ夫人。あなたは情愛を知つた人のやうに話をなさることね。あなたのやうな女に情があるものですか。情なんぞがあなたにあるものですか。

あなたは買はれて賣られるのです。(L、C、に坐る)

アーロン夫人。(苦しげに身を動かす、さうして自分を制する。さうしてウキンダミーヤ夫人に近づく、話しかけて夫人の方へ手をさし出す、併し夫人には觸れない) 何とでもお好きなやうにお思ひなさい、私はちつとも憫れんでいたゞける身分ではございません。けれども私の爲めに、あなたの綺麗な若々しい御生涯を滅茶滅茶になすつてはなりません。すぐとこれから、おうち

へお歸りなさらなければ、どんな不幸が、此の末あなたの身にふりかゝつてくることか、御存じないのです。墮落のどん底へおちて人から卑しめられたり、嘲られたり、見捨てられたり、後指を差されたりする——さうしてロクでなしになつて、世間は相手にしてくれず、今にも假面を剥ぎ取られはしないかと氣遣つて、怕ろしい横道へすく／＼と這込んで行く、その間も恐ろしい世間の笑聲を聞いて、涙にまざる思をするやうな身の上になつたら、まあどんな心持でせうか、あなたはそれを御存じないのですわね。あなたは全く御存じないのですわね。犯した罪の酬いは受けなければなりません。一生涯罪の酬いをうけなければなりません。そんな事をあなたは全く御存じないのですわね。苦しんで罪が消えるものならば、今頃はもうとつくに私の罪は消えた筈ではございませんか、それがどんな怕ろしい罪だつたにしても。今夜あなた

は心のないものに心を授けて下さいました。授けておいてまたその心を破つては私を苦しませて居らつしやるのです。だがそんな事はどうでもようございませぬ、私は自分の生涯は誤つても、あなたの生涯は破壊させないつもりです。あなた、まあ、あなたは未だほんのお嬢さんです。取返しつかない事になつて了ひますよ。あなたは御自分のお力では安全な處へお着きになれない方でございます。智慧も勇氣も、あなたは持つてゐらつしやらない。恥辱を忍ぶことは出来ないのです。いゝえ！お歸りなさいまし、ウキンダミーヤさん。御歸り遊ばせ。あなたを愛する夫の許へ。あなたが愛する夫の許へ。あなたにはお子さんがおあります。ウキダミンーヤさん。お子さんの處へお歸り遊ばせ。今だつて、泣いたり笑つたりしてあなたを呼んでゐらつしやるのです（ウキンダミーヤ夫人立上る）神さまはあなたにあのお子さんをお恵み下さ

つたのですよ。あなたにはお子さんの生涯を立派なものになさる義務があります。お子さんの生涯を守つて上げなければなりません。お子さんの生涯があなたのお間違ひから破滅になりでもしよう者なら、あなたは一體何と神様にお答へなさるお積りでせうか。お家へお歸りなさいまし。ウキンダミーヤさん。——あなたの夫はあなたを愛して居らつしやいます。たゞの一度だつて、あなたを愛する道から外れた事は有ませんでした。よしんば夫に千人の戀人があつたにしても、あなたはお子さんのそばに居らつしやらなければなりません。夫がどんなにあなたを酷くなすつても、あなたはあなたのお子さんの傍に居らつしやらなければなりません。たとへ、夫があなたを見棄て、

（ウキンダミーヤ夫人は、涙がこみ上げて手を以て顔を覆ふ。アーリン夫人は

はウキンダミーヤ夫人の方へ走り寄つて）

ウキンダミーヤの奥さん！

ウキンダミーヤ夫人。（アーリン夫人の方へ手を差し延べ、子供がするやうに力無げな形をして）私を連れて歸つて下さいまし。私を連れて歸つて下さいまし。

アーリン夫人（ウキンダミーヤ夫人を掻き抱きさうにする。さうして、それから自らを制する。顔には非常に喜ばしさうな表情が浮ぶ）さあいらつしやいまし。あなたの上衣はどちらにございましたか。（ソーフアからそれを取上げ）これをお召し遊ばせ。さあ参りませう。（兩人は戸口へ進む）

ウキンダミーヤ夫人。お待ちなさい。人聲がしは致しませんか。

アーリン夫人。いえ、いえ、だれも來はしません。

ウキンダミーヤ夫人。いえ、いえ、誰か来ましたわ。ね、お聴きなさいまし！
おや！夫の聲でございますよ、此方へ参りさうでございますよ。助けて下さい。
い。あ！たくらんで居らつしやるのね。あなたが呼びになつたのですね。
(外にて人聲がする)

アーリン夫人。しッ！私はお助けするために来たのですよ、出来る事なら。
併し、もうお仕舞ひです！御覽なさい。(窓のカーテンを指す)おかくれな
さい。この機会を逸しては大變です！早く！

ウキンダミーヤ夫人。だが、あなたは？

アーリン夫人。いえ、私は宜しうございます。私は皆さんに逢ひます。

(ウキンダミーヤ夫人、カーテンの後にかくれる)

アウガスタス卿(外で)冗談じゃない。ウキンダミーヤ、君は歸つちやいかん

よ！

アーリン夫人。アウガスタスさんだ。そんなら困るのは私だわ。

(ちよつとの間躊躇する。偕あたりを見廻し、扉R口を見て、そこから外へ出る)

(ダーリントン、ダンピイ、ウキンダミーヤ卿、アウガスタス、ロオトン、セシル、グレームの五人登場)

ダンピイ。こんな時刻に、クラブから俺達を追ひ出すなんて、迷惑千萬だ！

まだやつと二時だ。(椅子に坐り)夜の華やかな時間はこれからと言ふところだ。(欠伸をして目を閉ぢる)

ウキンダミーヤ卿。ダーリントンさん。アウガスタスの望み通りに、お宅へお

邪魔出来るのは結構だが、私はゆつくりしては居られないのでね。

ダーリントン卿。おや、そりや残念だ。まあシガアでもいかいす。

ウキンダミーヤ卿。ありがたう。(坐る)

アウガスタス卿。(ウキンダミーヤ卿に向ひ) おい君、歸るなんてことがあるもんかね。大事な用件がどつさりあるんだせ。(エテーブルに向つてウキンダミーヤ卿と一緒に坐る)

セシル、グレーム。あ、分つてゐるよ。^{みんな}皆心得て居るよ。タッビーはアーリン夫人のことばかり言つて居る。

ウキンダミーヤ卿。だが君の知つた事ぢやないだらう。え、セシル君。

セシル、グレーム。然うとも。それだから面白いんだよ、僕は自分の仕事となると退屈でとても我慢は出来ないよ。僕は人の事にお世話がしたいんだ。ダーリントン卿。何かやりますかね。君達。セシル君、君はウイスキーソードがよささうだね。

セシル、グレーム。結構(ダーリントン卿と一緒にテーブルの方へ行く)アーリン夫人は素的に綺麗に見えたぢやないか。

ダーリントン卿。僕はアーリン夫人黨の一人ぢやないからなあ。

セシル、グレーム。以前は僕もさうぢやなかつた。が、今では僕もさうなのだ。

あの女はとう／＼僕を説き伏せてカローリンの叔母に紹介させたほどだからね。今頃は叔母さんの處へ御馳走になりに行つて居ることだらうよ。

ダーリントン卿(びつくりして)まさか?

セシル、グレーム。なあに本當だとも、叔母さんのところへ行つてゐるんだよ。

ダーリントン卿。一寸失敬するよ。僕はあした出發するつもりだからね。五六本手紙を書かなければならないんだ。(卓の傍に坐る)

ダンビイ。賢い女だ、アーリン夫人は。

セシルグレイム。おい、ダンビー！ 君は寐て居るのかと思つた。

ダンビー。うむ、寐て居るのさ。僕は常に寐て居るのさ！

アウガスタス卿。素的に伶俐な女だ。何しろ己の馬鹿をよく御承知だからね、ちやうど僕が自分自身で知つて居るほどよく知つて居る。

(セシル、グレイムは笑ひ乍らアウガスタスの方へ歩みより)

まあ君達は笑ふかも知れないが、本當に自分を理解してくれる女に逢ふといふ事は稀なことだよ。

ダンビー。怖ろしく危険な事だよ。遂には其女と結婚する様な事になるからね。セシル、グレイム。ダンビー、君はもう二度とアーリン夫人には逢はないのかと思つた。さう、さう、君は昨夜クラブでさう言つたぢやないか。君は聞いたと言つたつけね——(小聲になつてアウガスタスに囁く)

アウガスタス卿。うむ、さう言つたよ。

セシル、グレイム。それからウイスバアデンの話は？

アウガスタス卿。その事も話したよ。

ダンビー。それから、彼の女の収入のことも？ タツビー、それも話したかい。

アウガスタス卿。(真面目な聲になつて) 彼の女は明日その事を話す筈だよ。(セシルグレイムC、テーブルに歸る)

ダンビー。馬鹿に商賣ちみてるな近頃の女は。吾々の祖母さんは捨鉢になつて身をまかしたものだ、その祖母さんの孫娘達は、何か身のためになる事が必要ならば捨鉢にならないからな。

アウガスタス卿。君はあの女を悪い女にしたいのだね。悪い女ぢやないよ。

セシル、グレイム。悪い女は人を迷惑させる。善い女は人を退屈させる。彼等

の相違はたいそれ位のものさ。

アウガスタス卿（シガアを吹しながら）アーリン夫人には未来があるよ。
ダンピイ。アーリン夫人には過去があるさ。

アウガスタス卿。僕は過去のある女が大好きだ。話をしても第一面白いよ。

セシル、グレーム。あの女とならばさぞ君は澤山に話があるだらうよ。（立上つてアウガスタスの方へ行く）

アウガスタス卿。君は冷やかすつもりか、冷やかすつもりかい。

セシル、グレーム（アウガスタスの肩へ手をやる。）なあ、タツピイ、君は面目も名譽も失つてしまつたんだせ、併し腹を立てゝはいかん――

アウガスタス卿。おい君、僕が若しもロンドンで第一番のお人善しでなかつたら――

セシル、グレーム。僕達はおつと君を尊敬すべき筈だ。さうぢやなからうか、君、
（すんく歩いて行く）

ダンピイ、近頃の青年は全く奇怪だね。ちつとも白髪頭を尊敬しないんだからな。（アウガスタス腹立しげに四邊を見渡す）

セシル、グレーム。アーリン夫人はタツピイを非常に尊敬して居るよ。

ダンピイ。それからね、アーリン夫人はほかの女に對していゝ模範を示すものだね。近頃の女は、一體夫でない男には手ひどく残酷を極めて居る。

ウキンダミーヤ卿。ダンピイ、君はおかしな人間だね。セシル、君もその舌を始末したまへ。君はあの女のことなんかちつとも知りはない癖に、何時でもあの女をこき下して居る。

セシル、グレーム。（L、C、なるウキンダミーヤの方へ進み行き）おい、アーサー、

私は決して悪口は言はない。僕はたゞお喋りをするだけなのだ。
ウキンガミーヤ卿。悪口とおしやべりとはどう違ふね。

セシル、グレーム。さあ、おしやべりは愉快だよ！ 歴史はたゞおしやべりだ。悪口はおしやべりだが教訓がついて居る。だがね、僕は決して教訓はしないよ。教訓する奴は一般に偽善者だ。さうして教訓する女は一般に不器量だ。ノンコンフオミストの良心を持つて居る程、女に不釣り合ひなものはない。喜ぶべきことには、大抵の女はそれを知つて居るがね。

アウガスタス卿。君、それには僕も同感だよ。

セシル、グレーム。そいつは困つたな。タツビー。人が賛成してくれる度ごと
に僕は間違つて居るやうな氣持がするんだ。

アウガスタス卿。君、私が君達の時代には――

セシル、グレーム。併し、君は我々の時代にはならなかつた。またなる事もあ
るまい。(Cへ進んで)おい、ダーリントン、かるたをしやう。アーサー、君も
やらないか。

ウキンガミーヤ卿。澤山だよ。セシル。

ダンビー。(溜息をついて。)あゝ！ 結婚しちやあ人間もおしまひだ。結婚は
シガレットのやうに人間を不道徳にする。おまけにもつと金がかゝる。

セシル、グレーム。かるたは無論やるんだらうな？ タツビー。

アウガスタス卿。(テーブルに近づき自分でブランデーグラスを注ぐ)やれない
よ、二度と再び酒を飲んだり、勝負をしたりしないと、云ふ事をアーリン夫
人に約束したんだからね。

セシル、グレーム。おいタツビー、正しい道の方へ迷ひ込んで困るせ。量見

を入れかへさせられると退屈な奴になつちまふからな。そんな事をさせるのが女の最も悪い奴さ。奴等は常に男を善良にしようとして居る。ところが折角善良になると、此度逢つても、奴等は我々を愛しはしないのだ。奴等は我が取返しをつかない悪い者になつて居る事を欲する。さうして我々を面白くも何ともない人間にして、捨て、しまはうとする。

ダーリントン卿。(手紙を書いて居たRテーブルから立上り。)さうして奴等は何時でも我々を悪いものに見て居る。

ダンビー。僕は男と言ふものがさう悪いとは思はない。尤もダンビーだけは別だがね。

ダーリントン卿。いや、我々は泥溝はろぼよに居るのだ、併し或者はそこから天の星を眺めて居る。(Cテーブルに坐る)

ダンビー。我々はみな泥溝に居るのだ、併し或るものは其所から天の星を眺めて居るのだつて？ 君は確に今夜は非常にロマンチックだね、デアリントン。

セシル、グレーム。ロオマンチック過ぎるよ。君はラブをして居るに違ひない。當の相手の娘は誰だね。

デアリントン。僕の愛して居る女は自由な身でない。或は自分で自由ではないと思つて居る。(話してゐる間、本能的にウキンダミーヤ卿を眺める)

セシル、グレーム。それでは夫のある女だな！ 夫のある女の眞實位厄介なものはないね！ 而も妻帯した男は少しも御存じのない事なんだ。

デアリントン卿。その女は僕を少しも愛しはしないよ。その女は善良な婦人だ。その女は私が今まで知つて居る、たつた一人の善良な婦人だ。

セシル、グレアム。今迄に會つた事のあるたつた一人の善良な婦人だつて？
ダアリントン卿。さうだとも。

セシル、グレアム（シガレットに火をつけながら）それなら、君は果報者さ！
だつて、私は何百人といふ善良な女に會つた。私は善良な女でないのは出
會した事はない。世の中は全く善良な婦人で一杯になつて居る。さう云ふ
女を知るのが、中流社會の教育と言ふものだ。

ダアリントン卿。あの女は純潔で、無邪氣だ。あの女は我々男子の失つたもの
を悉く持つて居る。

セシル、グレアム。君、純潔とか無邪氣とか言ふものが、一體我々男子にとつ
て何になるのだい。そんなものよりうまく出来上つたポタンの穴の方が、す
つと有難味があるぜ。

ダンピイ、で、君、その女は實際君を愛してゐないのだね？

ダアリントン卿。うん、愛しては居ないのさ。

ダンピイ。そいつあ結構な事だ、此の世の中には只二つの悲劇がある、一つは
求めて居る物が得られない事で、も一つはそれが得られることだ。後の方が
一層悪いんだ、それが本當の悲劇なのだ、だが、その婦人が君を愛して居な
いと言ふのは面白いね。一體君は自分を愛して居ない婦人を、何時まで愛し
てゐられるだらうか。ねえ、セシル。

セシル、グレアム。私を愛して居ない婦人を？ と云ふんだね。勿論一生涯さ。

ダンピイ。私もさうなんだ。さういふ女を見付けるのは仲々むづかしい。

ダアリントン卿。何だつて君はさう自惚れられるんだらうな、ダンピイ。

ダンピイ。自惚れなんてものとは違ふよ。残念な事だと思つて言つたんだ、僕

はこれ迄に何時でも熱烈に愛されて居た。それが残念なのだ。それが厄介極まる事なんだ。折には一人になつて、ほつと息をつきたいんだ。

アウガスタス卿。(まほりを見廻して) つまり君その間に、自身を教育するんだらう。

ダンビー。いや、其間に覺えた事をみんな忘れるんだ。其の方がもつと重大なんだ。タツビー(アウガスタス卿は不安さうに腰かけたまゝで體をゆする)

ダーリントン卿。君達はなんて皮肉なんだらう!

セシルグレアム。皮肉屋つてどんなもんだい。(ソファの背に腰かけて)

ダーリントン卿。總てのものゝ代價は知つて居るけれども、價値を知らない人なんだ。

セシルグレアム。それからねえ、感傷家と言ふのものは、總てのものに途方も

ない價値を認めるが、一寸したのものゝ相場を知らない人なんだ。

ダーリントン卿。君は面白いねえ、セシル。君は如何にも苦勞人見たいに話をしてゐるね。

セシル、グレアム。僕は苦勞人だもの。(暖爐の前へ進み寄る)

ダーリントン卿。何だ、まだ若いくせに!

セシル、グレアム。それが間違ひなんだ。経験は生活に對して敏感を持つか、持たんかの問題だ。私は敏感をもつて居る。だがタツビーは持つて居ないんだ。タツビーに云はせると経験とは自分の過去の事ださうだ。たゞそれだけのことさ(アウガスタスは怒つたやうに四邊を見渡す)

ダンビー。経験とは誰でも自分の過失に與へた名前なのさ。

セシル、グレアム。(ストーブに背を向けて立ち乍ら)然し過失は犯すべきもの

ではない。(ソーフアに置いてあるウキンダミーヤ夫人の扇に目をつける。)

ダンビー。過失がなければ人生は極めて退屈になるだらう。

セシル、グレーム。勿論君は君の愛して居るその女に極めて忠實なんだらうね、その善良な女に？　ねえダーリントン。

ダーリントン卿。セシル、一人の女を本當に愛すれば、世界中の他の女は其人には絶対に無意味な者になつて了ふ。戀は人を變化させる、私は變化したよ。

セシル、グレーム。おや、おや、こいつは面白い、タツビー、私は君に話したい事がある。(アウガスタスはわざと知らぬ振をする)

ダンビー。タツビーに話しても駄目だ、まるで煉瓦の壁に物を言ふも同然だ。

セシル、グレーム。だが、私は煉瓦の壁に話したいんだ。私に反對しないのは煉瓦の壁位なものさ！　タツビー！

アウガスタス卿。話？　何だい？　(立上つてセシル、グレームの方へ行く)

セシル、グレーム。此方へ來給へ、君でなくつちやならないんだ。(傍白)　ダーリントンは戀愛の純潔など、厭に教訓ぶつたことを云つて居るが、その癖自分の部屋へ年中女を連れ込んで居るぢやないか。

アウガスタス卿。まさか！　まさか！

セシル、グレーム。(低聲で)　本當だよ、女の扇があるじやないか。(扇を指さす)

アウガスタス。(クス／＼笑ひ乍ら)　こいつあ驚いたなあ。

ウキンダミーヤ卿。(戸口によりながら)　もう私は歸ります。ダアリントンさん。

君がこんなに早く英國を立去るのは實に残念なことです。またこちらへお歸りになつたらお訪ね下さい。私も妻もお待ちして居ります。

ダアリントン卿。(ウキンダミーヤ卿と舞臺の前面へ出て)　幾年も歸つて來られ

さうもありませんな。さやうなら。

セシル、グレアム。アーサー。

ウキンダミーヤ卿。何だい？

セシル、グレアム。一寸君に話したい事があるんだ。ちよつとー 來給へ。

ウキンダミーヤ卿。(外套を着ながら) いや、もうさうしては居られない。もう 歸りますよ。

セシル、グレアム。特にお話ししたいんだ。非常に君を面白がらせる事なんだ。

ウキンダミーヤ卿。(笑ひ乍ら) また例の冗談だね。

セシル、グレアム。さうちやない。本當にさうちやないよ。

アウガスタス卿。(ウキンダミーヤの方へ進みより) おい君、まだ歸つちやいないよ。澤山話したい事があるんだ。セシルは君に見せたいものがあるさう

だよ。

ウキンダミーヤ卿。(ずつと進み來り) 一體何のことだね。

セシル、グレアム。デアリントンには現に此の自分の部屋に婦人を連れ込んで居るんだせ。女の扇があるぢやないか。面白いな。(間)

ウキンダミーヤ卿。や！(驚いて扇を掴む——ダンビイ立上る)

セシル、グレアム。何事だね。

ウキンダミーヤ卿。デアリントンさん！

デアリントン卿。(ふり返り乍ら) えゝ！

ウキンダミーヤ卿。妻の扇がどうして此處にあるのです。いゝです、離して下さい。

デアリントン卿。奥さんの扇ですつて？

ウキンダミーヤ卿。左様。これを御覽なさい！

ダーリントン卿。(ウキンダミーヤ卿の方へ歩みつゝ) 僕は知らん。

ウキンダミーヤ卿。(知らない筈はありません。御説明がききたいものです。放してくれ、おい、(セシルに向つて言ふ)

ダーリントン卿。(傍白) さうすると此處へ、来て居るんだな。

ウキンダミーヤ卿。聽して下さい。どうして妻の扇がこゝにあるのです？ 返

辭をなさい。どうあつても、私はあなたの部屋を一々詮索せずには置かない。萬一妻が居ようものなら、私は——(動く)

ダーリントン卿。此の部屋を詮索することはなりません。あなたにそんなことをする権利がありませんか。斷じて許しません！

ウキンダミーヤ卿。卑劣極る、隅々まで探さないうちは、此處に動かん。ふむ、

カアテンの影で誰やら動いて居るな。

(カアテンC、に突進する)

アーリン夫人。(Rの後に登場) ウキンダミーヤさん。

ウキンダミーヤ卿。アーリンさん。

(皆一齊に立ち上りあたりを見廻す。ウキンダミーヤ夫人はカアテンの後より現はれ、室Iよりこつそりぬけ出す)

アーリン夫人。どうも相済みません。今夜お宅をお暇する時、つひ私のだと思つて奥さんの扇を持つてまゐりました、ほんたうに済みませんでしたわねえ。

(ウキンダミーヤ卿から扇を受け取り、ウキンダミーヤ卿は輕蔑をもつてアーリン夫人を見る。ダーリントン卿は愕いたり怒つたりする表情で立つて居る。

アウガスタス卿はわきへふりむく。人々は互に顔を見合して笑ふ。幕)

第四幕

場面序幕に同じ

ウキンダミーヤ夫人。(ソープアによりながら)如何して夫に話されよう。とても話せはしない。死ぬやうな思ひだ。私がああ怖ろしい部屋から逃げて来た後で、どんな事がもち上つたことやら。ひよつとするとアーリンさんは、あそこへ行つたわけを皆に包まず打明けはしなかつたかしら。あの怖ろしい扇の本當のわけを打明けはしなかつたかしら。あゝ、そのわけが知れようものなら二度と夫に顔向けが出来ようか。夫は決して許しはすまい。(ベルにふれる)ふだん私達は、誘惑や、罪悪や、過失から遠くかけ離れて安穩に暮して

居ると思つて居る。處が不意にこんな羽目になつてしまふ。まあ、人の生活は恐ろしいものだ。生活が私達を支配して居るのだ。私たちが生活を支配して居ると思つたら大間違ひだ。

(ローザリーRに登場)

ローザリー。奥様お呼びなさいましたか。

ウキンダミーヤ夫人。あゝ、殿様はゆふべ何時頃おかへり遊ばしたか、お前知らないかい？

ローザリー。五時まではお歸りはございませんでした。

ウキンダミーヤ夫人。五時？ 殿様は今朝ほど私の部屋をお叩きなさらなかつたかい？

ローザリー。左様でございます。——九時半にお出でなされました。奥様はま

だお目覺めなさいませんと申上げて置きました。

ウキンダミーヤ夫人。何とかおつしやりはしなくつて？

ローザリー。奥様の扇のことを何やらおつしやつて居らつしやいましたが、私にはよくわかりかねました。扇がおなくなりになつたのでございませうか。私も探して見ましたが見つかりませんでした、それからパーカーさんも、どのお部屋にもないと申します。彼の人はお部屋を一つ残らず投して、見晴しまでもたづねたのでございます。

ウキンダミーヤ夫人。いえ、いゝのよ。パーカーにも心配しないやうに、さうお言ひ。いゝんだから。

(ローザリー退場)

ウキンダミーヤ夫人。(立上りつゝ)あの人はきつと夫に話すに違ひない。私に

は目に見えるやうだ——他人のために身を犠牲にする不思議な行動を、やすやすと、無考に、さうして美事にやつてのけはしたものゝ、あとでは随分高いものについたと心付く人間が、目に見るやうに想像される。どうしてあの女が、自分の身の破滅か、私の身の破滅か、など、迷ふ筈はなからうに、何といふ不思議なことだらう。私はあの女を人前で構はず恥しめようとした。それだのにあの女は私の身をかばつて、私の身代りに人前で恥をかいてくれた。世間の物事といふものは皮肉なものだわ。いゝ婦人とか悪い婦人とか言つて居る言葉の中にだつても苦い皮肉があつたのだわ。まあ、何といふ教訓だらう。もう役に立たなくなつた時に、やつとその教訓がわかつて來るなんて、まあ人生といふものは何と言ふ苦いものなのだらう。もしやあの女が昨夜のことを話さないなら私が言はなけりやならない。まあ、それにしたつて

恥かしい、恥かしい。その話しをすることはあの時の思ひをもう一度すつかり繰り返すことなのだ。行ひが人生の第一の悲劇なら、言葉はその次の悲劇だ。いや恐らくは最も悪い悲劇なのだ。言葉は本當に無慈悲なものだ……

おゝ！(ウキンダミーヤ卿が這入つて來たので吃驚する)

ウキンダミーヤ卿。マーガレット、何といふ顔色だい！

ウキンダミーヤ夫人。よく眠れなかつたものですから。

ウキンダミーヤ卿。(妻と一緒にソファへ坐り) そりや濟まなかつた。大變遅

く歸つたものだから。お前を起すのはやめにしたのだ。お前泣いて居るね。

ウキンダミーヤ夫人。えゝ、泣いて居ます。あなた、お話ししたいことがございますの。

ウキンダミーヤ卿。ねえお前、お前は気分がよくないのだよ。あまり氣を使ひ

過ぎるからだ、田舎へ行かうぢやないか。セルビーへ行けば病氣なんかすぐ直つて了ふ。もうロンドンの季節はあらかたお了ひだ。斯うして居るのも無駄なことだ。ねえ、お前、なんなら今日にも立たうぢやないか。(立ち上る)
三時四十分の汽車なら、樂に間に合ふよ、ファンネンへ電報を打つて置かう。(室を横ぎつてテーブルにつき電報を書く)

ウキンダミーヤ夫人。えゝ、今日参りませう。いえ、今日は駄目でございますの、あなた。立つ前には是非お目にかゝらなければならぬ方がございますの——私に親切にして下さつた方に。

ウキンダミーヤ卿。(立上つてテーブルを離れソファにもたれる) お前に親切にしてくれたつて？

ウキンダミーヤ夫人。それ處か、もつと、もつと(立ち上つて夫の傍へ行く)

お話ししますがね、あなた——ですが、どうぞ、私を愛して下さい。愛して下さい。あなたが今まで愛して下さいに。

ウキンダミーヤ卿。愛して下さいにだつて？ お前は昨夜此處へ来たあの穢らしい女のことを考へて居るんだらう？（ブラ／＼室を歩いて、妻が坐つて居るRへ坐る）お前はまた妙にかんぐつてゐるんだね。いやそんな筈はない。

ウキンダミーヤ夫人。かんぐつてなんか居りませんわ。私が悪うございました。馬鹿でございました。今となつてやつとそれに気がついたのでございます。

ウキンダミーヤ卿。昨夜お前があの女を招待したのは大變いゝことだつたけれど、もう二度と、あの女に會つてはならんよ。

ウキンダミーヤ夫人。何故そんなことをおつしやいますの？

ウキンダミーヤ卿。（妻の手をとつて）マーガレット、私はアーリン夫人は自分で罪を犯したのではなくつて、人からひどい目に逢はされた不幸な女だと思つて居た。どうかして善良な人間にならう、一時の過失から墮落して了つたが、どうかしてもとの身分に歸らう、もう一度正しい生活を送らうと思つて居るのだと私は考へた。私はあの女の言ふ事を信じて居た——私はとんだ思ひ違ひをした、あの女は女としては精一杯なれるだけの悪黨だ。

ウキンダミーヤ夫人。アーサー、女のことをさうひどくおつしやるものではありませんよ。私には今では、人間は二つの別口の人種か、或は別の生き物で、もあるやうに、かつきりと區別出来るものだとは思はれません。いゝ女と言はれて居る人間にも恐ろしいことが、いはゞ捨鉢な心持や、剛情や、嫉妬や、

罪惡がひそんで居ります。併し、悪い女とは言はれても、その人達にも悲しみや、悔みや、憫れみや、犠牲の心が隠れて居ます。私はアーランさんを悪い女とは思ひません。私は断じてさうは思ひません。(間)

ウキンダミーヤ卿。ねえお前、あの女はもう駄目だ。あの女が私達に對してどんな悪いことを巧らんで居ようと、そりやどうだつて構はない。だがお前は二度と再びあの女に會ふのぢやないよ。あれは許し難い女だ。

(間。)

ウキンダミーヤ夫人。私はあの方に逢ひます。あの方にこゝへ来て貰はうと思ひます。

(間。)

ウキンダミーヤ卿。断じてなりません。

ウキンダミーヤ夫人。あの方は、一度はあなたの(強く)お客様として此處へお出でいたしました。今度は私の(強く)お客様としてお出でにならなければなりません。それで五分々々ではありませんか。

ウキンダミーヤ卿。あの女は此處へ来てはならないのだ。

ウキンダミーヤ夫人。(立上り) もう遅うございます。今更そんなことをおつしやつても。(室を歩く)

ウキンダミーヤ卿。(立上り) マーガレット、ゆふべ此處から歸つて、あの女は何處へ行つたか、それをお前が知らうものなら、お前はあの女と同席しようとはしないだらう。實に沙汰の限り、見下げ果てた女だ。

ウキンダミーヤ夫人。あなた、私はもう隠してはゐられません。すつかり打開けて了ひます。私はゆふべねえ——

(パーカー、名刺と扇をのせた盆を捧げて登場)

パーカー。アーリン夫人が、昨夜間違つてお持ち歸りの扇をお返しにお出でなさいました、お名刺に御用向きが書いてございます。

ウキンダミーヤ夫人。まあ！ どうぞお出で下さいと申し上げておくれ。(名刺を読む) ようこそお出くだすつたと申上げておくれ。あの方はわざわざお出下すつたのですよ。(パーカー退場) アーサー。

ウキンダミーヤ卿。(名刺をとつてそれをみつめて) マーガレット、會はないでおくれ、兎に角まあ私に先づ會はせておくれ。ほんたうに油断のならぬ女だ。

(間。)

ウキンダミーヤ夫人。私はあの方に會ふのが正當でございます。

ウキンダミーヤ卿。お前は非常な憂目の瀬戸際に來て居るのだ。そんなあぶない處へ近よつてはなりません。お前より先に私が會はなければなりません。

ウキンダミーヤ夫人。何故でございませう。

パーカー(再び登場) アーリン夫人。

(アーリン夫人登場)

アーリン夫人。御機嫌よう。奥さん。(ウキンダミーヤ卿に向ひ) 御機嫌よう。

扇のことはまことに済みませんでしたわねえ。何だつてあんな馬鹿な間違ひをしでかしたのでせう。私、馬鹿ですわね。丁度お宅の方へ参り合せたものですから、お目にかゝつて、扇をお返ししてよくお詫びをしようと存じましてね。それからよくお別れをしたいとも存じまして。

ウキンダミーヤ夫人。(アーリン夫人と一緒にソファの方に行き、一緒に坐

る) お別れですつて? アーリンさん。

アーリン夫人。え、私はまた外國へ行つて住むつもりでございますの。英國の氣候は私にはあひません。私は心臓を傷めたのです。それで氣に入らないと申すのです。南國で暮したうございますわ。ロンドンには霧が多いのと、堅苦しい人達が多いので困りますわ、ウキンダミーヤさん、霧が堅苦しい人達を生んだのか、それとも堅苦しい人が霧を生んだのか、何しろ霧や堅苦しい人達を私をいら／＼させますの。だから私は今日の午後、遊覽列車で旅をするつもりなのです。

ウキンダミーヤ夫人。今日の午後ですつて? 私は大變あなたにお目にかゝりたかつたのでございます。

アーリン夫人。まあ御親切に! ですがもうお暇しなければなりません。

ウキンダミーヤ夫人。またお目にかゝることは出来ないでせうか? アーリンさん。

アーリン夫人。もうお目にかゝれないと思ひます。私達の生涯は遠方へかけ離れて居ます。ですが一寸お願ひしたい事がございます。どうぞ奥さんお寫眞を一枚頂かせて下さいませんか? 頂戴が出来ればどんなに嬉しいでございませう。

ウキンダミーヤ夫人。さあ、どうぞ、あのテーブルの上に一枚ございますわ、御覽に入れませうね。(テーブルの方へ行く)

ウキンダミーヤ卿。(アーリン夫人の傍へ来て小聲で話す。)昨夜あんな事をして置きながら、よくづう／＼しくやつて來られたもんですね。

アーリン夫人。(面白さうに笑ひ乍ら) ウキンダミーヤさん、意見をおつしやる

前に行儀作法を御注意遊ばせ。

ウキンダミーヤ夫人。(もとの處へ来て)お世辭を言つていらつしやるんでせう。

わざと差上げるほど綺麗ぢやございません。(寫眞を見せる)

アーリン夫人。どういたしまして、ずつとお美しうございます。ですが坊ぢやんと一緒に寫しになつたのはございませんか。

ウキンダミーヤ夫人。ございますわ。それがよろしうございますの？

アーリン夫人。さやうでございます。

ウキンダミーヤ夫人。一寸お待ち下さいまし。二階の部屋にございますから、

持つて参りますわ。

アーリン夫人。お手數をかけて相済みません。

ウキンダミーヤ夫人。(扉R行へく)どう致しまして、ちつともそんなことはご

ざいません。

アーリン夫人。ありがたうございます。(ウキンダミーヤ夫人Rより退場。アー

リン夫人ウキンダミーヤ卿に向ひ)あなた今朝は少々御機嫌がお悪いやうね。

ウキンダミーヤさん、どうしたわけなの、アーガレットと私とは大變仲よしになつて行くのに。

ウキンダミーヤ卿。私は妻とあなたを同席させるわけには行きません。それ

にあなたは私に本當の事を言はないのですからね。アーリンさん。

アーリン夫人。本當のことはあの子にだつて申しはしません。

ウキンダミーヤ卿。本當の事を話していたらきたかつたと、時折思ひますよ。

さうしたら此の六ヶ月と云ふ間の不幸や、心配や、苦悶にも會はずに居られたらうと思ふのです。死んだとはかり思ひ込ませられて居た母親が、現在生

き居て、しがも悪いことをして離婚されて来た女だ。變名して人を惱ませて歩く悪い女だ。その悪い女があれの生みの母親であると知らせる程なら、あなたの望み通りどれだけでもあなたに金を出して上げよう、費澤三昧でもさせて上げようと思つたのです。結局昨日のやうなことになる爲めにそんな真似をして居たのです。私は始めて妻と争ひをしたのです。私にはどんなにそれが辛いことか、あなたにはよくお分りがないのだ。どうしてあなたにそれがわからう。あれの可愛らしい唇から初めて聞いた激しい言葉も、もとはと言へばあなたのおかげです。もうあなたとあれとは同席させるさへ忌まはしいのです。あなたはあれの無邪氣なところを滅茶々々にしてしまつた。(L、Cに進む)たとひ、どんな不身持があつたにしろあなたと言ふ方は、正直な眞實な人だとばかり私は思ひ込んで居ました。併し、さうではなかつたので

す。

アーリン夫人。何だつてあなたはそんな事をおつしやるの？

ウキンダミーヤ夫人。あなたは私に強ひて招待状を書かせて、私の妻の宴會に來られた。

アーリン夫人。私の娘の宴會にねえ。

ウキンダミーヤ卿。あなたは宴會に來られた。宅から歸つて、ものゝ一時間とは立たないうちに、あなたは或る男の家に行つて居られた。さうして皆の前でいゝ恥をかいたのですね。(舞臺の前面Cへ行く。)

アーリン夫人。さうですよ。

ウキンダミーヤ卿。(彼の女の方を向かへり)ですから私にはあなたを、見下げ果てた、不埒な女として卑しめる権利があるのです。私にはあなたに二度と

この家へ足を入れて下さるなといふ権利があります。妻の傍へ来やうなと
思つて下さるなと言ふ権利があります——

アーリン夫人。(冷やかに) 私の娘のどこでせうね?

ウキンダミーヤ卿。あなたはあれを自分の娘など、呼ぶ権利はありません。

あなたはあれがまだほんの子供の時分、自分の戀人の爲めに、あれを見棄て
て了つたのです。さうしてあなたもその戀人から見棄られたのでした。

アーリン夫人。(立上り) あなたはそれを私の戀人の名譽になさるおつもり、そ
れとも私の名譽になさるおつもりなのですか。

ウキンダミーヤ卿。あなたの戀人の方の名譽にしませうよ。もうあなたといふ
ものがそれほどよく分つて来たからには。

アーリン夫人。お氣をつけなさいまし。もつとおつゝしみなさつたらいかい

す。

ウキンダミーヤ卿。言葉なぞに凝つてはゐられません。あなたといふものが、
私にはよくわかつてゐるんですからね。

アーリン夫人。(ちつと彼を見つめ乍ら) さあ、どうですかね。

ウキンダミーヤ卿。よく分つて居りますとも。二十年間と言ふものは、あなた
は一人で、呑氣に暮して居られた、子供のことなどは何とも思はれずに暮し
て居られた。或日あなたは新聞を見て、あなたの娘が金持の男と結婚したと
言ふ事を知つた。其時にふと悪い量見が起つたのです。あなたの様な女があ
れの母であると言ふことをあれには知らせたくない。そんな恥かしい目に逢
はせる位なら、どんなことでも私は我慢するだらうと見てとつて、あなたは
私のところへ來られたのです、さうして強請りを始めたのです。

アーリン夫人。(肩をそびやかす) ゆするなんてそんな汚い言葉はお使ひ遊はすな。下等といふものです。仰言る通り私は好い機会を掴みました。

ウキンダミーヤ卿。うん、あなたは好機会を掴んだ。併しゆふべ悪い處を人に看破られて、その好機会を棒にふつたのです。

アーリン夫人。(意味ありげな笑ひをもつて) 仰せの通り、私は好機会を棒にふりました。

ウキンダミーヤ卿。うちから妻の扇を間違へて持ち出したり、それをデアリントンの部屋に置き忘れたりするなんて、本當に許し難いことです。私はもう扇を見るのもいやだ。あの扇はもう妻には使はせない。扇は汚れてしまつた。それはあなたのお手許に置くべきでした。お返し下さるには及ばないのです。

アーリン夫人。頂いて参りませう(歩き行きつゝ) 大變に綺麗ですから。(扇をとり上げて) マーガレットに聞いて見ませう。

ウキンダミーヤ卿。私は妻があなたに上げるといふと思ふ。

アーリン夫人。きつと一も二もなくくれますわ。

ウキンダミーヤ卿。それと一緒にあれが毎晩お祈りをする前に、接吻をする小さな畫像も上げてほしいものだな。それはね、美しい黒い髪の無邪氣らしい娘の小さな畫像だが。

アーリン夫人。あゝさうでした。忘れもしません。思ひ出せば古いことです。

(ソーフアに腰をかける) それは未だ結婚しない時のことでした。眞黒な髪の毛と無邪氣な表情が其頃の流行でしたわ。ウキンダミーヤ。

(間)

ウキンダミーヤ卿。どう言ふ譯です。今朝此處へ來られたのは。何の目的です
ね？

アーリン夫人。(聲に反語の調子を帯びて)私の可愛い娘に別れを告げにまゐつたのです。勿論。(ウキンダミーヤ卿恐つて下唇をかむ。アーリン夫人は彼を見つめる。さうして彼女の聲と様子とが真面目になる。彼女の語調は深い悲しみの調子を帯びて居る、しばしの間本性を見せる)あゝ！私はあの子を相手に芝居染みた愁嘆を見せたり、あの子に私の身の上を話してあの子に取違つて泣いたり、そんな馬鹿らしい狂言をやつて見ようなど、思つて居るのではありませんわ。私には母の真似をしようなど、いふ考はございません。生涯にたつた一遍私は母親の心持といふものを経験しました。それはゆふべの事でございます。ほんたうに恐ろしいございました——苦しいございま

た。それは／＼苦しいございました。あなたのおつしやつた通り、二十年の間、私は子供なしで暮した——私は今でも子供なしで暮したい。(自分の感情を淺はかな笑ひに紛らして)それにねえ、ウキンダミーヤさん、もうすつかり大人になつた娘にどうして私が母らしい仕打が出来ませう。マーガレットは今二十一になります。私はいつでも二十九より餘計には申しません、精々まあ三十位の處です。石竹色の着物を着た時が二十九、でない時は三十と申します、ですからとても私はあれのお母さんにはなれさうもございませんわ。奥様がどんな幻を持つてゐらつしやらうと、私の知つた事ではありません。あなたの奥様は死んだ純潔な母親の思出を、大切にしておつしやればよろしいのです。自分の幻を持ち續けて行くだけでさへ、仲々なまやさしいことではありませんのよ。私はゆふべその幻を見失つてしまひました。私に

は情愛といふものはないのだと思つて居りましたのに、私にも情愛と言ふものがあつたのでございます。さうしてそんな心持は私にはちつとも似合はないことがわかりましたのよ、ウキンダミーヤ、どうせそんなものは近代の衣裳とは釣合ひは致しません。情愛を持つて居る人は老けて見えますよ。(小さな鏡をテーブルから取出して見る) なまじつか情愛を知つて居ると大事な瀬戸際で人の一生を臺なしにしてしまひます。

ウキンダミーヤ卿。あなたは恐ろしい人間です、本當に恐ろしい人間です。

アーリン夫人。あなたは私に修道院へ行つて尼になるか、病院の看護婦にでもなつて欲しいのでせう、近頃の下らない小説に出て来る人物のやうにね。あなたは本當に馬鹿ですわね、實際の生活では私達はそんな真似は致しません。兎に角見てくれのいゝうちはそんな真似はしませんよ。今時悔悛をしたつて

それが何の氣休めになりませう。たゞ快樂あるのみですわ、悔悛なんてすつかり時代後れになつてしまひました。本當に女が悔悛するのなら下手な仕立屋に行けばいゝんですよ。さもなければ誰だつて本當にはしませんわ。どんなことがあつたつて私にはそんな真似は出来ません。いゝえ、私はあなた方とは全く縁のない人間になつて了ふつもりです。此方へ參つたのがそもそも間違ひでした。私は昨夜そのことに心付いたのでです。

ウキンダミーヤ卿。宿命のやうな怖ろしい間違ひでした。

アーリン夫人。(笑ひ乍ら) 殆ど宿命のやうね。

ウキンダミーヤ卿。直ぐとあの時、一部始終を妻に打明けしないで残念な事をしたと思ふ。

アーリン夫人。私は自分の悪いやり方を悔んで居ますわ。あなたは善いやり方

を悔んで居らつしやるのね。それが私達の相違です。

ウキンダミーヤ卿。あなたには信用は置けない、断じて妻に打明ける覺悟です。知つた方が妻の爲めなのです、私の口から。それは無限の苦痛のもととなるでせう。妻は非常にいやしめられたと思ふでせう。だが當然それを知る可きです。

アーリン夫人。お話しなさらうと言ふのですね。

ウキンダミーヤ卿。話すつもりです。

アーリン夫人。(ウキンダミーヤの傍へよつて) もしあなたがあればにその事を打明けてもしたら、私はわざと自分の名を汚してあの子を一生立瀬のない人間にしてやりますよ。あの子の身の破滅になるのです。さうしてあの子を不幸にするのですよ。それでもあなたはたつて話さうとなさるんなら、私は出来

るだけ墮落をします。出来るだけ辱しめを受けます。話してはなりません、断じてならないのです。

ウキンダミーヤ卿。何故？

アーリン夫人。(間を置いて) 私があの子の事を心配して居る。愛して居ると申しましたら、あなたは私をお笑ひなさいますでせうね。

ウキンダミーヤ卿。私にはほんたうにさうとは思はれないのです。母の愛といふものは、獻身的な、博愛的な、犠牲的なものです。どうしてあなたにそのやうな事がわかるのですか。

アーリン夫人。御尤もでございます。私にどうしてそのやうな事がわかりませう。もうその話は止めにしやうちやございまんか——私の身の上を娘に打明ける事だけは、たつておことわり申します。それは私の秘密でございます。

あなたの秘密ではございません。もし私がその事をあの子に話さうと決心をすれば、また話さうと思へばお暇をする前に娘に打明けてしまひます。さうでない限りは私は決して話しは致しません。

ウキンダミーヤ卿（腹立たしげに）そんなら、すぐにここをお立ち下さるやうにお願ひ申します。マーガレットには私から言譯けをして置ませう。

（ウキンダミーヤ夫人Rに登場。手に寫眞をもつてアーリン夫人の處へ行く。ウキンダミーヤ卿はソーフアの後へ行つて、場面が進んで行く間、氣づかはしげに、アーリン夫人を見守つて居る）

ウキンダミーヤ夫人。アーリンさん、お待たせして失禮いたしました。寫眞が何處へ行つて了つたか見つかりませんでしたの。でもとうとう主人の化粧部屋に御座いましたわ——主人がとつて了つたのでございますわ。

アーリン夫人。（寫眞を受取つてそれを見る）ほんたうに可愛らしうございますこと——思つて居た通りでございますわ、（ウキンダミーヤ夫人と共に、ソーフアに行つて彼女と並んで腰をかける）これがあなたの赤ちやんでいらつしやいますのね！ 何といふお名前ですの？

ウキンダミーヤ夫人。父の名前をとりました、ジェラードと申しますの。

アーリン夫人。（寫眞を下に置き乍ら）ほんたうに？

ウキンダミーヤ夫人。え、女の兒でしたら、母親の名前をつけるのでしたけれど。私の母はやはり私と同じにマーガレットと申しますの。

アーリン夫人。私の名前もマーガレットと申しますの。

ウキンダミーヤ夫人。まあ！ ほんたうに！

アーリン夫人。え、（間）奥さん、あなたはお亡くなりになつたお母様をお慕

ひ遊ばして、それで、さう言ふ名前をおつけなさいましたのね。私ウキンダミーヤさんから伺ひましたわ。

ウキンダミーヤ夫人。私達はみんな理想と言ふものを持つて暮らして居るのですわ。少くとも理想を持つて居るのが當り前でございますわ。さうして私の理想は母親なのでございます。

アーリン夫人。理想といふものは危険な物でございますわ。理想よりも現實の方がよろございます。現實はつらいものですけれど、それでも理想よりは増しでございますわ。

ウキンダミーヤ夫人。(握手しながら)もし自分の理想を失へば私はすべてのものを失つて了ひますわ。

アーリン夫人。すべてのものを？

ウキンダミーヤ夫人。えゝ。(聞)

アーリン夫人。あなたのお父様は、時々あなたにお母様の事をお話しになりまして？

ウキンダミーヤ夫人。いゝえ。それを話すのが、父には非常に苦痛でございましたの。父は母親が、私の生れる二三ヶ月前になくなりました時の様子を、話してくれた事がございました。父は話をしながら、眼に一杯涙を滯めて居りました。さうして、もうどうぞ母の名前を言つてくれるかと申しました。

私の父は——私の父は實際失戀の爲めに死んだのでございますわ。父の一生はほんたうに荒んだ一生でございましたわ。

アーリン夫人。(立上る)では、もうこれで失禮いたしますわ。

ホキンダミーヤ夫人。(立上る)まあ、ごゆつくりなすつて下さいまし。

アーリン夫人。いゝえ、もうお暇しなければなりません。私の馬車がもうきつと戻つて来たでございませう。ジエツドバラア夫人の處まで手紙を持たせてやつたのですけれど。

ウキンダミーヤ夫人。アーサー。あなたアーリンさんの馬車が戻つて来たかどうか、聞いて来て下さいませんか。

アーリン夫人。どうぞ、そんな御心配には及びません。

ウキンダミーヤ夫人。(夫に) でも、どうぞ聞いて来て下さいまし。

(ウキンダミーヤちよいと躊躇してアーリン夫人を見る。アーリン夫人知らん顔をして居る。ウキンダミーヤ卿室を去る)

(アーリン夫人に。) あゝ、私はあなたに何と申上げてよいやら。あなたはゆふべ私を救つて下さいました！ (彼女の傍へ行く)

アーリン夫人。もし！ もうそんな事はおつしやいますな！

ウキンダミーヤ夫人。いゝえ、申さなければなりません。私はあなたを犠牲にさせて平氣で居る譯には参りませんわ。そんな事は私には出来ませんわ。それぢやあんまりお氣の毒でございませう。私は何もかも夫に話してしまひます。それが私の義務でございませう。

アーリン夫人。いゝえ、それはあなたの義務ではございませぬ！ あなたは少くとも、ほかの人にしなければならぬ義務がございませぬ。あなたは、私に恩があるとおつしやつたではありませんか？

ウキンダミーヤ夫人。私はあなたに、何から何まで御恩になつて居りますわ。アーリン夫人。そんならその恩返しに、どうぞ何事も黙つて居て下さいまし。

それより他に恩返しはありませぬわ。私が一生に一度、たつた一つの陰

徳をいたしましたのに、それを人に知られてしまつては、臺なしになつて了ひますわ。ゆふべの事は、お互の胸に收めて、必ず秘密にして置く事を、お約束なすつて下さいまし。あなたは夫の生活に不幸を持ち込んではいけません。そんな事をして夫の愛情を傷ける必要が何處にございませう。あなたは決してそれを傷けてはなりません。それでなくても愛情は亡び易いものなのでございます。ほんたうに、愛情ぐらゐ亡び易いものはございせんわ！どうぞ決して御主人にお話しなさらぬやうにお誓ひなすつて下さいまし。是非さう願ひいたしますわ。

ウキンダミーヤ夫人。(頭を下げながら) それはあなたのお考へでございませうけれど、私はさうは思ひませんの。

アーリン夫人。え、私の考へでございませう。さうしてあなたは決してあなた

のお子さんの事をお忘れになつてはいけませんよ——私はあなたをあのお子さんの母親として考へて見たうございませう。どうぞ御自分でも母親だといふ事をお考へなすつて下さいまし。

ウキンダミーヤ夫人。(見上げ乍ら) これから何時もさういふ考へで居りますわ。私はたつた一度母親の事を忘れた事がございました。——それは昨夜でございました。あゝ。もしも私が母親の事さへ忘れなかつたら、あんな愚かな、あんな間違つた事はいたしませんでしたのに。

アーリン夫人。(身をふるはせて) もし！ 昨夜はもうとうに過ぎ去つたのでございませう。

(ウキンダミーヤ卿登場)

ウキンダミーヤ卿。アーリンさん、あなたの馬車はまだ戻つてまゐりませぬ。

アーリン夫人。御心配には及びませんわ。辻馬車を雇つてまゐりますから。何だつてシユルスベリー候爵のやうに立派なものはないんですからね。では奥さん、これでほんたうにお暇をいただきます。左様なら（Cに行く）どうぞ私をお忘れなさいますな。さぞまあ私を變な女だと思召しませうね。さう言へば私はこの扇が大變氣に入つて了ひましたの。ばかに氣に入つたものですか、ゆふべ舞踏會の時にこれを持ち出して了つたのです。さうしてあなたは私にこれを下さいますでせうか？ きつと下さるだらうつて、ウキンダミーヤさんがおつしやいましたわ。あれはあの方のプレゼントなんで下さいますつてね？

ウキンダミーヤ夫人。お氣に召しましたらどうぞお持ち下さいますし。でもその扇子には私の名前がごさいますの。マーガレットと書いてごさいますの。

アーリン夫人。でも私達は名が同じでございすもの。

ウキンダミーヤ夫人。あゝ、さうでございましたわね。名前が同じだなんて何といふ不思議の御縁でございませう！

アーリン夫人。全く不思議でございすわ。ありがたうございす。——これをあなたのお形見に致しますわ。（握手する）

（バーカー登場）

バーカー。アウガスタス、ロートン閣下がおいででございます。アーリン夫人のお馬車が参りました。

（アウガスタス登場）

アウガスタス卿。やあ君、おはやう。奥さんおはやうございす。（アーリン夫人を見て）アーリンさん！